

高校生活と進路に 関する調査 2024



東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所が共同で行う「子どもの生活と学び」プロジェクトでは、2024年3～4月に、高校3年生（2024年3月時点）の調査モニターを対象にした調査を実施しました。このダイジェスト版では、2024年に行った調査の結果を、2018年、2021年の調査結果と比較し、高校3年生の意識と実態の経年変化や属性による違いをとらえています。

「子どもの生活と学び」研究プロジェクトについて … p.2
調査概要 …………… p.3
基本属性 …………… p.4

1 高校での学びと生活 …………… p.5～7
① 学習時間
② 学びの経験
③ さまざまな活動の状況

2 進路選択の状況 …………… p.8～17
① 専攻分野
② 入試方式・選抜方法
③ 進路決定の参考にしたこと

④ 進路決定に影響した人・情報
⑤ 進路選択の悩み
⑥ 入学後にしたいこと
⑦ 進学先の入学前教育
⑧ 大学受験に対する意識
⑨ 進路選択の主体性
⑩ 経済的不安・奨学金の意向

3 高校生活のふりかえりと将来に対する意識 …… p.18～19
① 高校生活のふりかえり
② 将来に対する意識

調査企画・分析メンバー …………… p.20

「子どもの生活と学び」研究プロジェクトについて

東京大学社会科学研究所とベネッセ教育総合研究所は、2014年1月に、「子どもの生活と学び」の実態を明らかにする共同研究プロジェクトを立ち上げました。

本ダイジェスト版では、この研究プロジェクトの一環として実施した「高校生活と進路に関する調査」の結果を紹介します。

研究プロジェクトの特徴

1 小学1年生から高校3年生の「現在」と「時代変化」をとらえることができる

本研究プロジェクトでは、小学1年生から高校3年生の子どもとその保護者に対して、毎年継続して調査を実施しています。これにより、12学年にわたる子どもの生活や学び、保護者の子育ての実態などの「現在」の様子（1時点の学年による違い）を明らかにできます。また、経年比較により、子どもと保護者の「複数時点の時代変化」をみる ことができます。

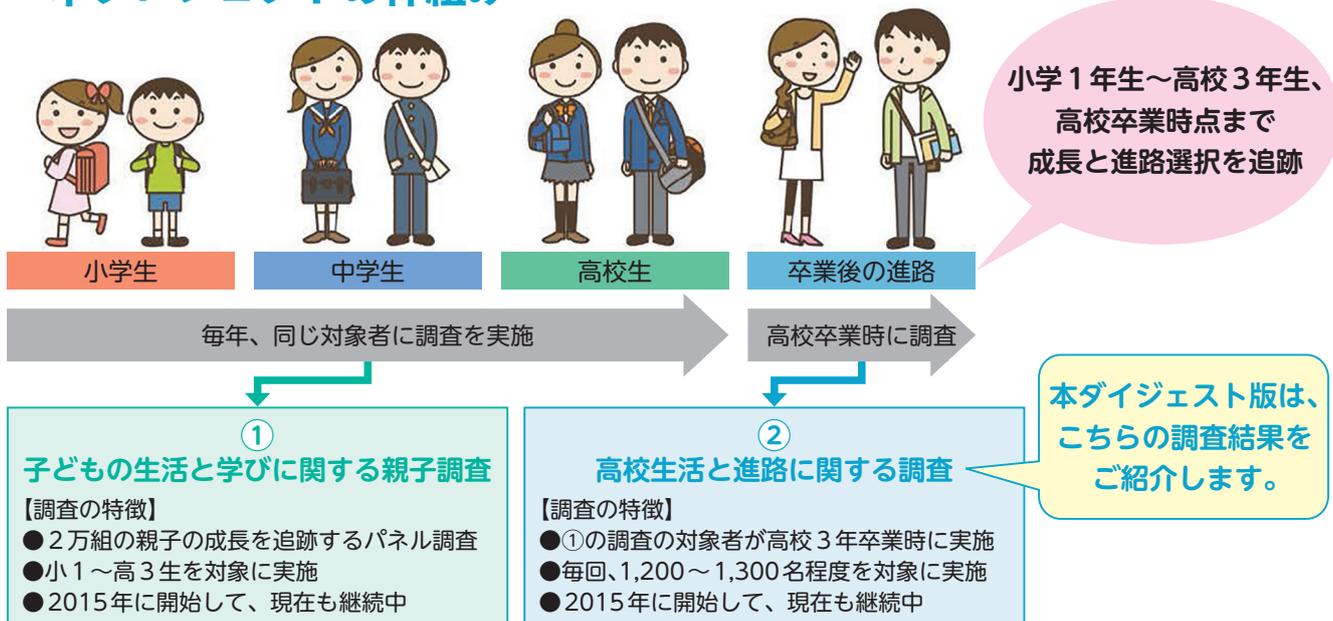
2 親子の「成長・発達」のプロセスをとらえることができる（親子パネルデータ分析）

また、本研究プロジェクトでは、同じ子どもとその保護者を継続して調査しています。これにより、子どもが毎年どのように成長・発達していくのか、また、それによって保護者のかかわりや意識はどのように変化するのかといった、同じ親子の「複数時点の成長・発達変化」の様子や因果関係を明らかにすることができます。

3 子どもの生活と学びにかかわる意識や実態を、幅広く詳細にとらえることができる

子どもを対象にした調査では、生活、学習、人間関係、価値観、自立の程度などを幅広くたずねています。また、保護者を対象にした調査では、子どもへのかかわりや子育て・教育の意識などをたずねています。この2つの調査から、子どもと保護者の日々の生活や学習の様子を浮かび上がらせるとともに、子どもと保護者の課題に迫ります。

<本プロジェクトの枠組み>



※研究プロジェクトの詳細は、ベネッセ教育総合研究所のWebサイトよりご覧ください。

<https://benesse.jp/berd/special/childedu/>

調査概要

調査テーマ 高校3年生の学習、生活、進路選択についての意識と実態

調査時期 2024年3～4月上旬

調査方法 郵送にて調査を依頼、Webにて回答
※2018年調査、2021年調査では、郵送法による自記式質問紙調査

調査の実施時期と調査対象

本ダイジェスト版は、2018年調査、2021年調査、2024年調査を取り上げ、分析を行う。

	子どもの生活と学びに関する親子調査	高校生活と進路に関する調査
調査対象	・小学1～3年生の保護者 ・小学4年生～高校3年生の子どもと保護者	・高校3年生の子ども
実施時期	・調査年の7～9月	調査年の3～4月上旬(卒業時実施)
2015年	○	○
2016年	○	
2017年	○	
2018年	○	○
2019年	○	○
2020年	○	
2021年	○	○
2022年	○	○
2023年	○	
2024年	○	○

2018年調査・2021年調査・2024年調査に関連する社会の動き

高校教育・大学入試の動き

- ・2020年1月
「大学入試のあり方に関する検討会議」にて議論開始(文科省)
- ・2021年1月
「大学入学共通テスト」スタート
- ・2022年4月
高校で「総合的な探究の時間」導入
高校で新学習指導要領が年次進行で実施

新型コロナウイルス感染症関連

- ・2020年3月より
新型コロナウイルス感染症流行
- ・2021年～2022年
新型コロナウイルス感染拡大のピーク
- ・2023年5月
新型コロナウイルス感染症収束宣言(WHO)

※研究プロジェクトの「調査モニター」のうち2024年3月時点の高校3年生に調査を依頼

発送数・回収数・回収率

	発送数	回収数	回収率
2018年	1,401	975	69.6%
2021年	1,449	991	68.4%
2024年	1,370	717	52.3%

調査項目

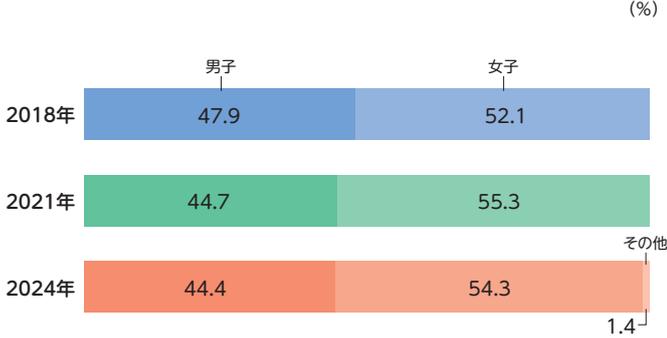
学習時間／高校生活での学びの経験／さまざまな活動への取り組み状況／4月からの進路／入試方式／選抜方法／専攻分野／入学後、経済的不安や奨学金の意向／入学難易度／進学先からの入学前教育／入学後にしたいこと／大学受験に対する意識／進路決定の参考にしたこと／進路決定に影響した人と情報／進路選択時の悩み／進路選択における主体性／高校生活のふりかえり／将来に対する意識 など

※データや解説文の表記に関する留意点について

- ・本ダイジェスト版で使用している百分率(%)は、各項目の算出方法に沿って出した値の小数点第2位を四捨五入して表示している。その結果、数値の和が100にならない場合がある。
- ・本ダイジェスト版の解説文では、項目の表記を省略する場合がある。
- ・本ダイジェスト版の解説文では、「四年制大学に進学」「短期大学に進学」を選択した人を「大学・短大進学者」、「専門学校・各種学校に進学」を選択した人を「専門・各種学校進学者」と表記している。
- ・本ダイジェスト版の各ページの図表(p5～p19)については、基本的には、最初の図表は調査対象者全体、もしくは進学者全体を対象に、下の図表は大学・短大進学者のみを対象に分析している。p13～p15の図表は大学・短大進学者を対象に分析している。すべての図表のタイトルに、分析対象を明示しているので、解説文やデータを読む際に注意が必要である。
- ・調査方法の変更に伴い、調査年ごとの違いを同じ条件で比較するため、設問ごとに「無回答・不明」を除いた実回答数を分母として数値の算出を行った。このため、これまでに公表した数値と若干異なることがある。

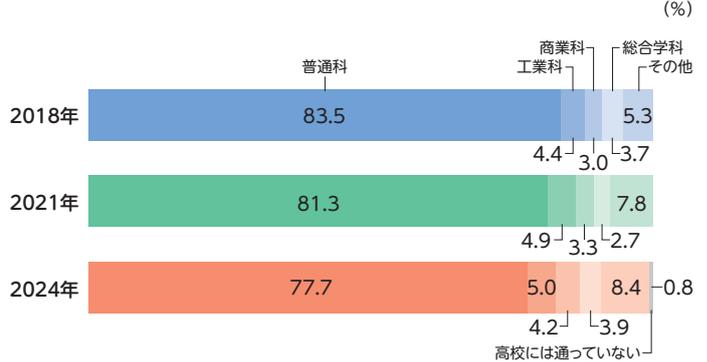
基本属性

●性別



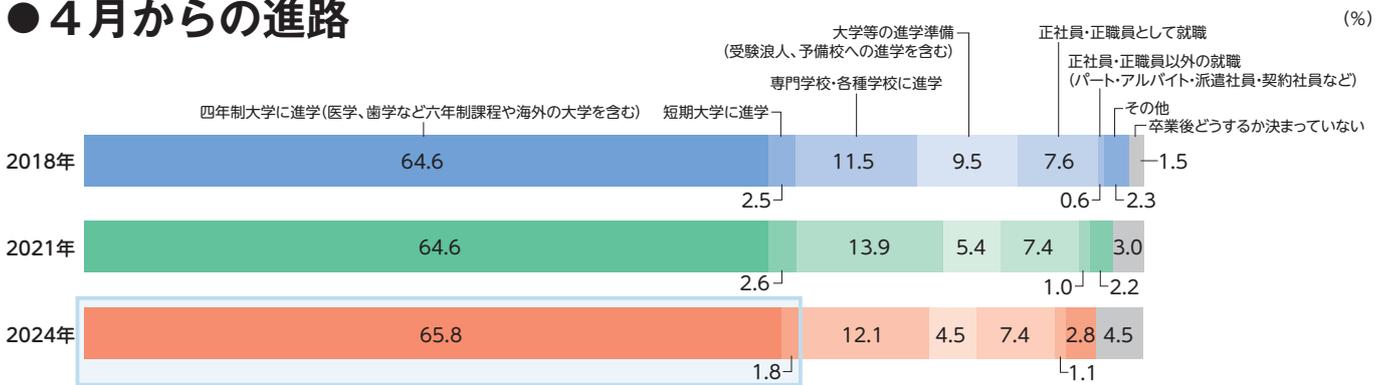
注 「その他」は、2018年調査、2021年調査ではたずねていない。

●通っている高校(学科)



注 「高校には通っていない」は、2018年調査、2021年調査ではたずねていない。

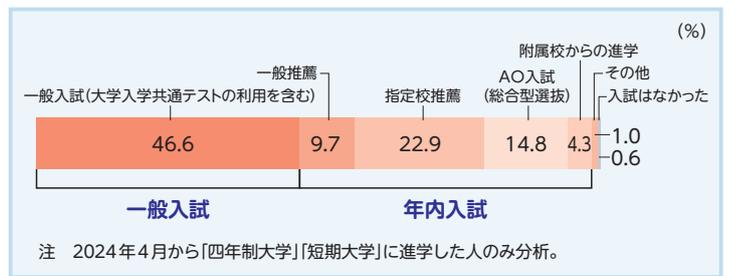
●4月からの進路



●入学難易度(2024年調査)

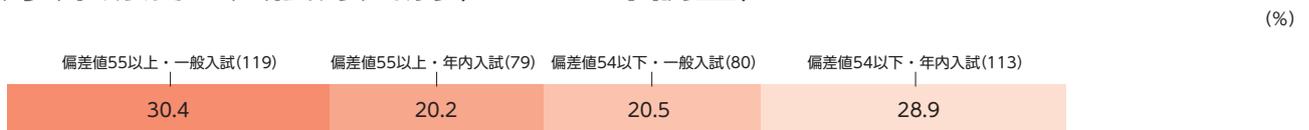


●入試方式(2024年調査)



注 2024年4月から「四年制大学」「短期大学」に進学した人のみ分析。

●入学難易度・入試方式別(2024年調査)



注 2024年調査では、2024年4月から「四年制大学に進学」もしくは「短期大学に進学」を選択した人に対して、入学難易度をたずねた。「おおむね偏差値65以上」「おおむね偏差値55~64」(自己評価)を選択した人を「偏差値55以上」(201名)とし、「おおむね偏差値45~54」「おおむね偏差値44以下」を選択した人を「偏差値54以下」(194名)とした。また「わからない」を選択した人を分析から除外した。
また、2024年4月から「四年制大学に進学」もしくは「短期大学に進学」を選択した人に対して、入試方式をたずねた。「一般入試(大学入学共通テストの利用を含む)」を選択した人を「一般入試」(237名)とし、「一般推薦」「指定校推薦」「AO入試(総合型選抜)」「附属校からの進学」を選択した人を「年内入試」(315名)とした。
さらに、上記で算出した入学難易度の2区分と入試方式の2区分と合わせて、「偏差値55以上・一般入試」(119名)、「偏差値55以上・年内入試」(79名)、「偏差値54以下・一般入試」(80名)、「偏差値54以下・年内入試」(113名)の4区分に分類した。

1 高校での学びと生活

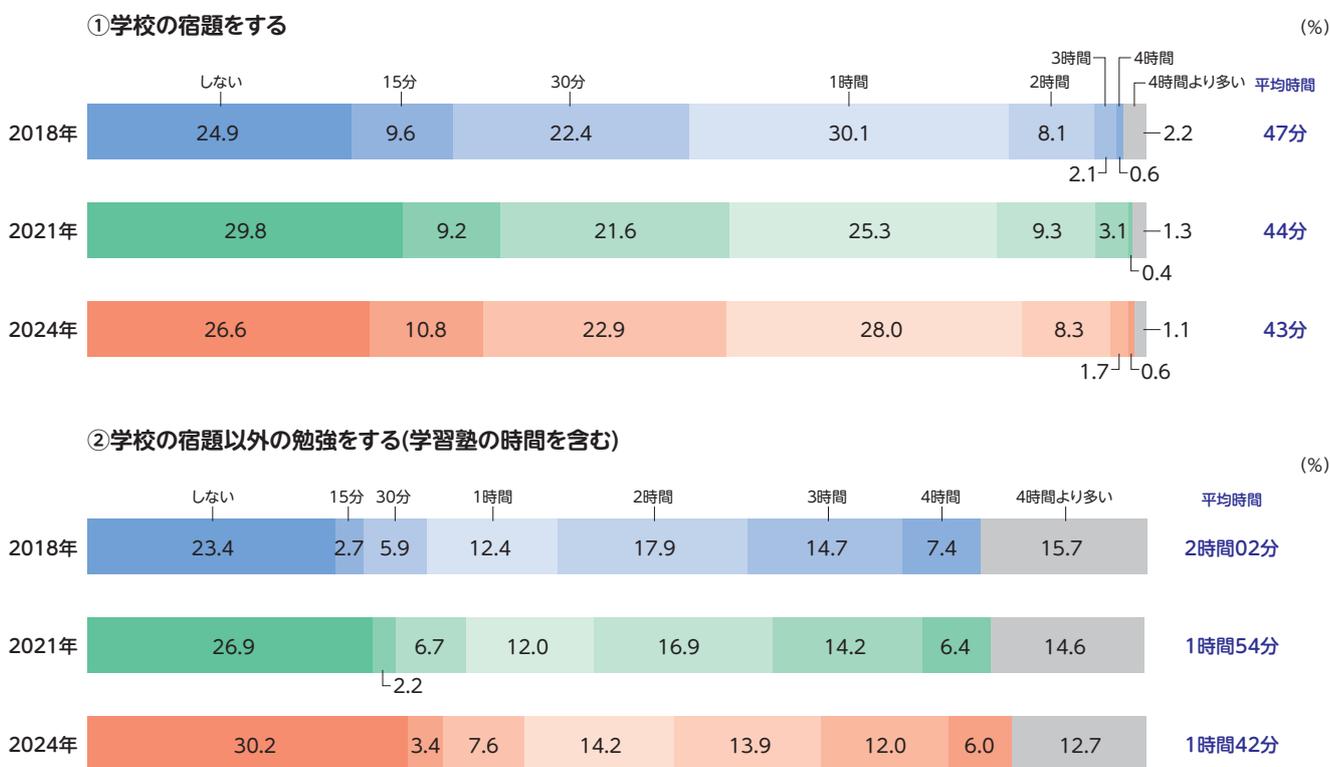
①学習時間

学校の宿題時間、宿題以外の学習時間がともに減少

【図1-1-1】高3生の「学校の宿題をする」時間(高3生の9月頃の平日1日当たりの平均時間)は、2018年調査では47分だったが、2024年調査では43分と4分減少した。また、「学校の宿題以外の勉強をする」時間(同)は、2018年では2時間02分だったが、2024年では1時間42分と20分減少した。【図1-1-2】2024年調査で大学・短大進学者について入学難易度・入試方式による違いをみると、「学校の宿題をする」時間は「偏差値55以上・年内入試」のグループがもっとも長く51分、「偏差値54以下・年内入試」のグループがもっとも短くて36分だった。「学校の宿題以外の勉強をする」時間は、「偏差値55以上・一般入試」(3時間03分)がもっとも長く、もっとも短い「偏差値54以下・年内入試」(1時間13分)と比べると、1時間50分の差が確認された。

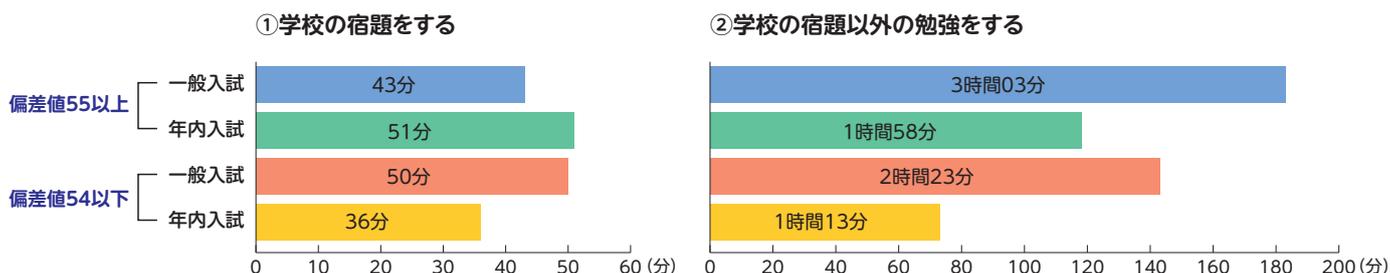
Q. あなたは高校3年生の9月頃、学校がある日に、次の勉強(学校の時間は除く)を1日にどれくらいしていましたか。

図1-1-1 高校3年生の学習時間(調査対象者全体)



注 平均時間は「しない」を0分、「1時間」を60分、「4時間より多い」を300分のように置き換えて算出。

図1-1-2 高校3年生の学習時間(大学・短大進学者、入学難易度・入試方式別、2024年調査)



注1 平均時間の算出方法は、図1-1-1と同様。

注2 2024年4月から「四年制大学」もしくは「短期大学」に進学し、進学先の偏差値(自己評価)および入試方式を回答した391名を分析。入学難易度・入試方式別の4区分の算出方法と人数については、p4の基本属性の「入学難易度・入試方式別(2024年調査)」を参照。

1 高校での学びと生活

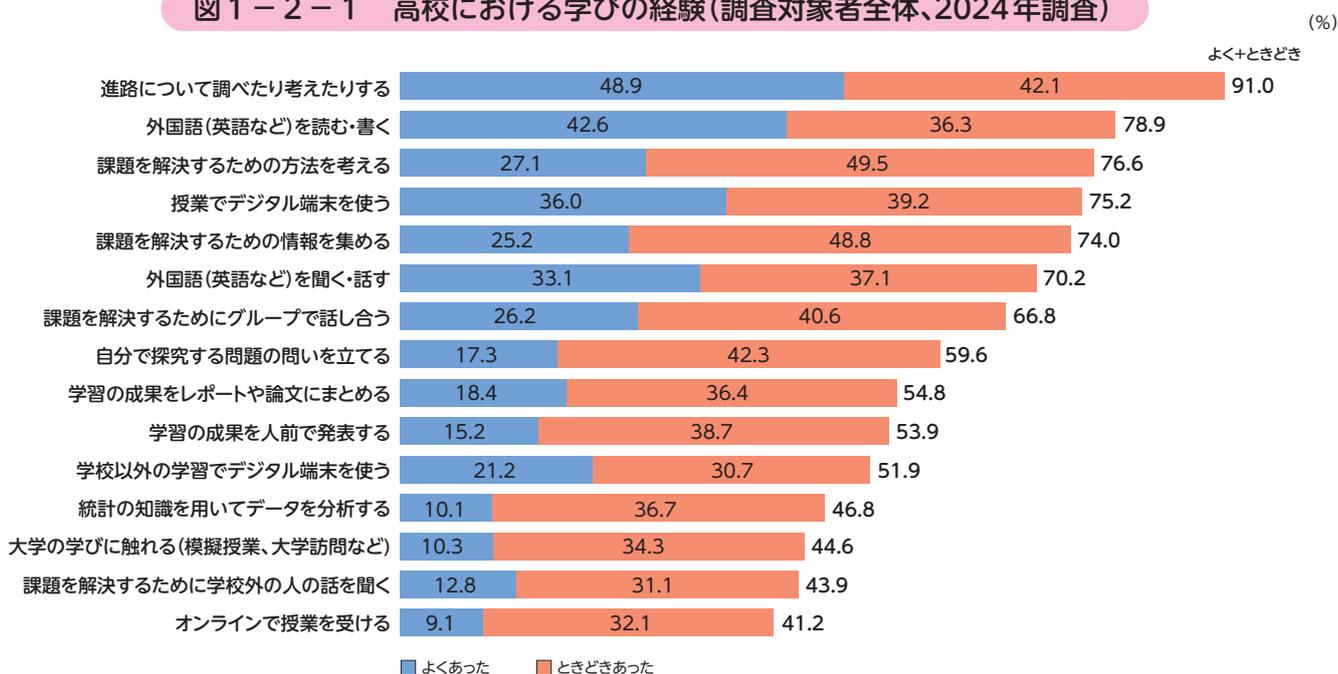
② 学びの経験

高校での学びの経験は入学難易度・入試方式によって異なる

【図1-2-1】2024年調査では高校での学びの経験についてたずねた。その結果、9割が「進路について調べたり考えたりする」を経験(よくあった+ときどきあった)していたほか、「課題を解決するための方法を考える」(76.6%)、「課題を解決するための情報を集める」(74.0%)、「課題を解決するためにグループで話し合う」(66.8%)、「自分で探究する問題の問いを立てる」(59.6%)などの探究活動にかかわる項目も過半数が経験していた。【図1-2-2】こうした活動について入学難易度・入試方式別にみたところ、相対的に「偏差値55以上・年内入試」で経験率が高い傾向がみられた。また、「課題を解決するためにグループで話し合う」「大学の学びに触れる」といった経験は、「偏差値54以下・年内入試」の高3生がもっとも高かった。

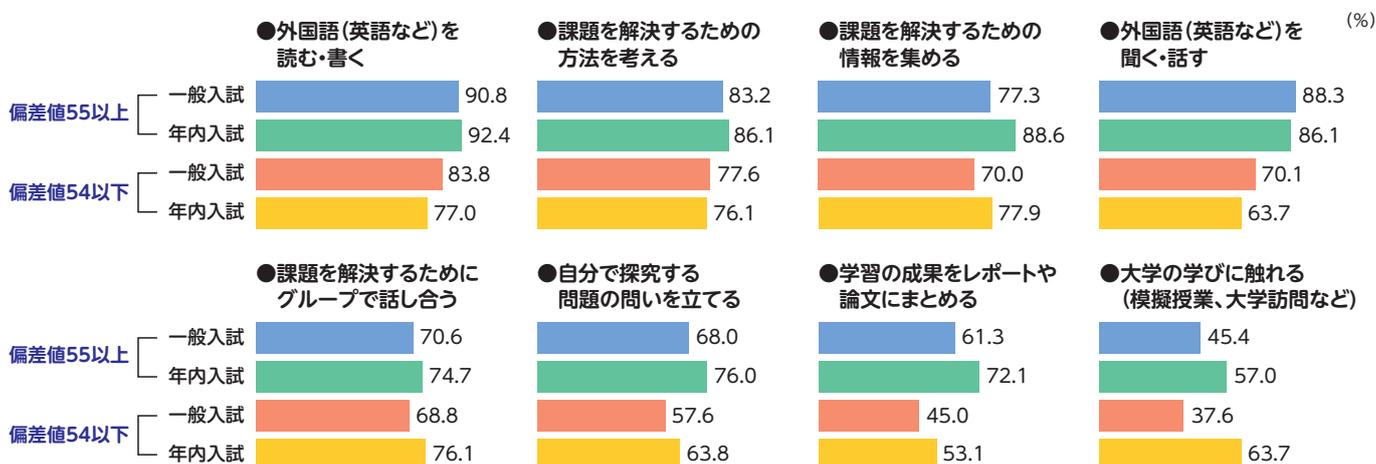
Q. あなたは高校生活において、次のような学習をどれくらい経験しましたか。

図1-2-1 高校における学びの経験(調査対象者全体、2024年調査)



注1 項目は「よくあった」+「ときどきあった」の数値の降順に示した。
注2 この質問は2024年調査でのみたずねている。

図1-2-2 高校における学びの経験(大学・短大進学者、入学難易度・入試方式別、2024年調査)



注1 「よくあった」+「ときどきあった」の%。
注2 図1-2-1の15項目のうち、入学難易度・入試方式別にみて、違いがみられた8項目を图示した。
注3 2024年4月から「四年制大学」もしくは「短期大学」に進学し、進学先の偏差値(自己評価)および入試方式を回答した391名を分析。入学難易度・入試方式別の4区分の算出方法と人数については、p4の基本属性の「入学難易度・入試方式別(2024年調査)」を参照。

1 高校での学びと生活

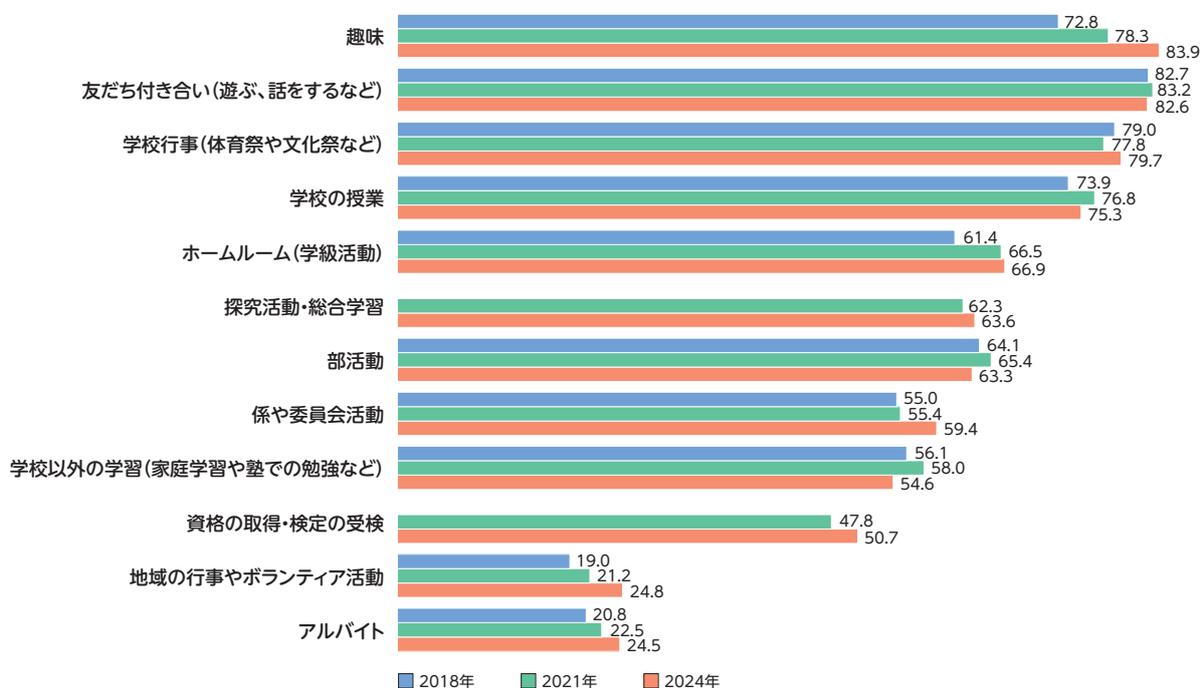
③ さまざまな活動の状況

「趣味」に積極的に取り組んだ割合が増加

【図1-3-1】高校生活で「趣味」に積極的(とても積極的+まあ積極的)に取り組んだ高3生は2018年調査に比べて11.1ポイント増加し、8割を超えた。このほか、「ホームルーム」「地域の行事やボランティア活動」に積極的に取り組んだ割合も、2018年調査と比べて増加している。【図1-3-2】2024年の大学・短大進学者の結果をみると、「偏差値55以上・年内入試」の高3生は「学校の授業」「探究活動・総合学習」「係や委員会活動」「資格の取得・検定の受験」など、より多様な活動に積極的に取り組んでいる。一方、「学校以外の学習」に積極的だった割合は「偏差値55以上・一般入試」で高いが、「偏差値54以下・年内入試」は低く、両者の間には40ポイント以上の開きがある。

Q. あなたは高校生活において、次のことにどれくらい積極的に取り組みましたか。

図1-3-1 さまざまな活動の状況(調査対象者全体)

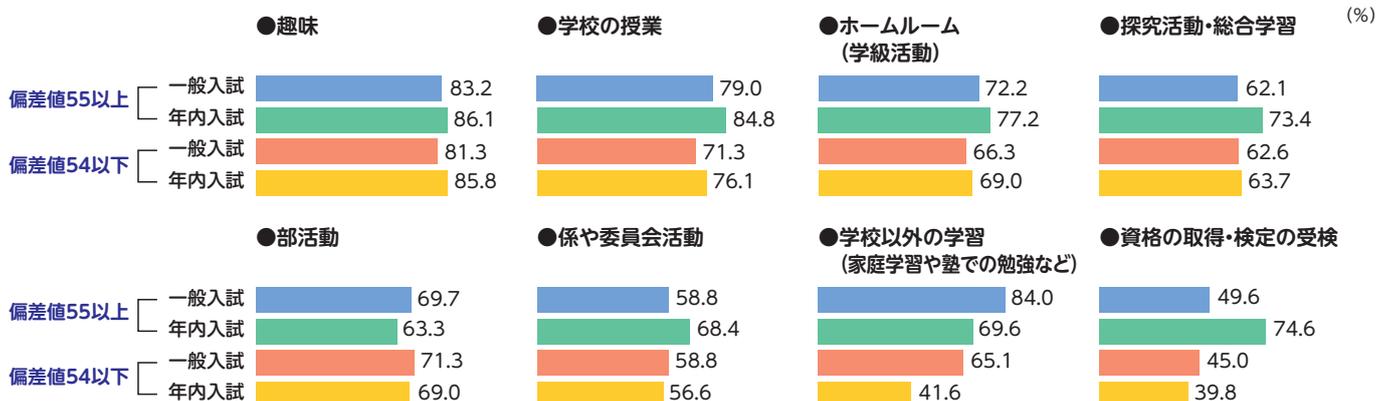


注1 「とても積極的」+「まあ積極的」の%。

注2 項目は2024年の数値(「とても積極的」+「まあ積極的」)の降順に示した。

注3 「探究活動・総合学習」「資格の取得・検定の受験」については2018年調査ではたずねていない。

図1-3-2 さまざまな活動の状況(大学・短大進学者、入学難易度・入試方式別、2024年調査)



注1 「とても積極的」+「まあ積極的」の%。

注2 図1-3-1の12項目のうち、入学難易度・入試方式別にみて、違いがみられた8項目を图示した。

注3 2024年4月から「四年制大学」もしくは「短期大学」に進学し、進学先の偏差値(自己評価)および入試方式を回答した391名を分析。入学難易度・入試方式別の4区分の算出方法と人数については、p4の基本属性の「入学難易度・入試方式別(2024年調査)」を参照。

2 進路選択の状況

① 専攻分野

「理系」以外の専攻は女子に多く、「理系」専攻は男子に多い

【図2-1-1】進学先の専攻分野は、2018年から2024年にかけて大きくは変わっていない。【図2-1-2】2024年調査の結果を性別にみると、男子は「理系」が多く、女子は「文系」「医療・福祉系」「芸術やデザイン系」が多い。「理系」専攻は、男子44.0%に対して女子は18.0%と大きな差がある。【図2-1-3】さらに進路別の結果をみると、専門・各種学校進学者は大学・短大進学者に比べて「医療・福祉系」「芸術やデザイン系」が多い。大学・短大進学者をみると、入学難易度を問わず「理系」は「一般入試」に多いのに対して、「文系」は「偏差値55以上・年内入試」に多い傾向がある。また、「医療・福祉系」は、「偏差値54以下・年内入試」での出現率が相対的にみて高かった。

Q. 進学先の大学・学校で専攻するのはどのような分野ですか。もっとも近いものを1つ選んでください。

図2-1-1 専攻分野(進学者全体)



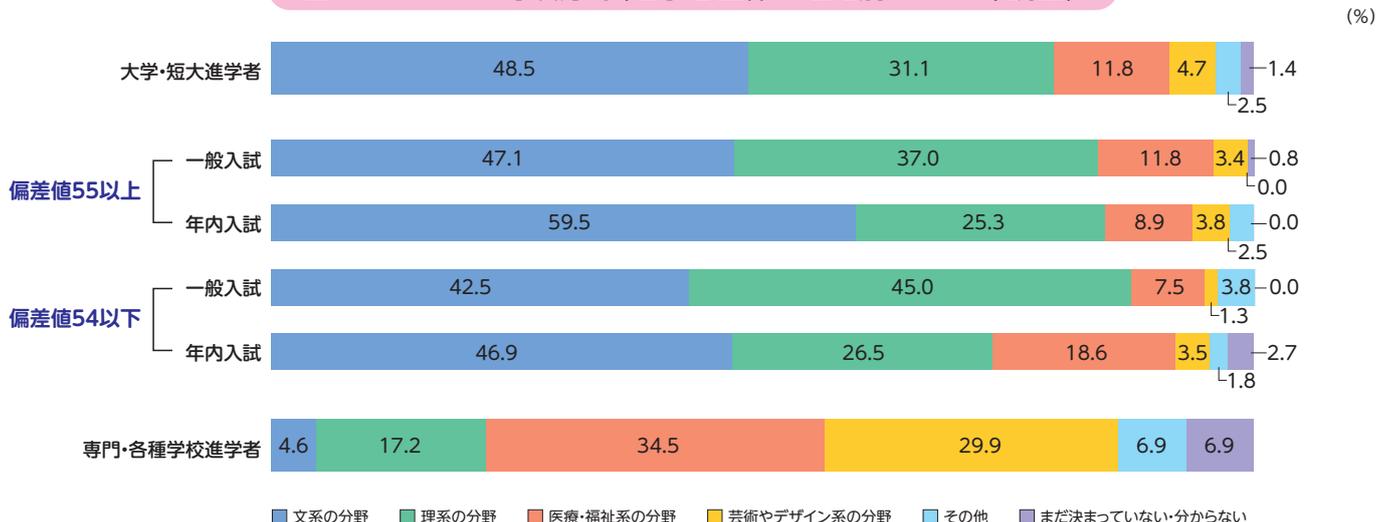
注 回答者は各調査年の4月から「四年制大学」「短期大学」「専門学校・各種学校」に進学した人。

図2-1-2 専攻分野(進学者全体、性別、2024年調査)



注 回答者は「四年制大学」「短期大学」「専門学校・各種学校」に進学した人。

図2-1-3 専攻分野(進学者全体、進路別、2024年調査)



注1 回答者は「四年制大学」「短期大学」「専門学校・各種学校」に進学した人。

注2 2024年4月から「四年制大学」もしくは「短期大学」に進学し、進学先の偏差値(自己評価)および入試方式を回答した391名を分析。入学難易度・入試方式別の4区分の算出方法と人数については、p4の基本属性の「入学難易度・入試方式別(2024年調査)」を参照。

2 進路選択の状況

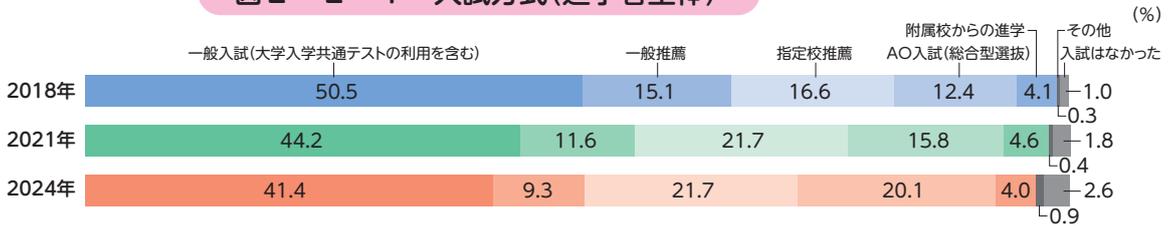
②入試方式・選抜方法

具体的な選抜方法は入試方式により大きく異なる

【図2-2-1】進学者全体の入試方式の変化をみると、「一般入試」「一般推薦」が減少する一方で、「指定校推薦」「AO入試(総合型選抜)」は増加した。【図2-2-2】2024年調査について進路別にみると、大学・短大進学者は「一般入試」が、専門・各種学校進学者は「AO入試(総合型選抜)」が、それぞれ約半数を占めていてもっとも多い。大学・短大進学者についてみると、入試方式は入学難易度によって大きく異なり、「一般入試」は「偏差値65以上」では68.0%であるのに対して、「偏差値44以下」では23.5%だった。【図2-2-3】具体的な選抜方法を複数回答で選択してもらったところ、「大学入学共通テスト」「個別の学力検査」は「一般入試」に多く、「面接」「口頭試問」「小論文」は「年内入試」に多い。

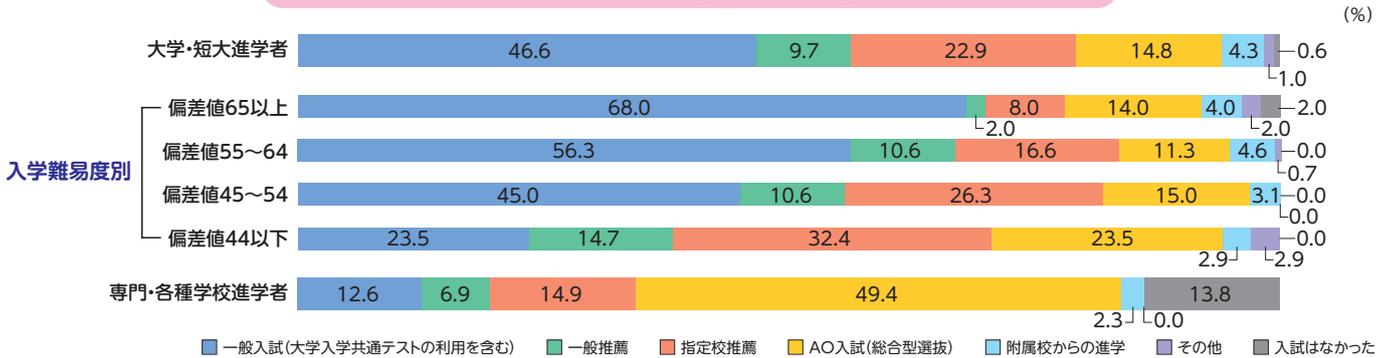
Q. 進学先の大学・学校に入学するために、入学試験を受けましたか。あてはまるものを1つ選んでください。

図2-2-1 入試方式(進学者全体)



注 回答者は各調査年の4月から「四年制大学」「短期大学」「専門学校・各種学校」に進学した人。

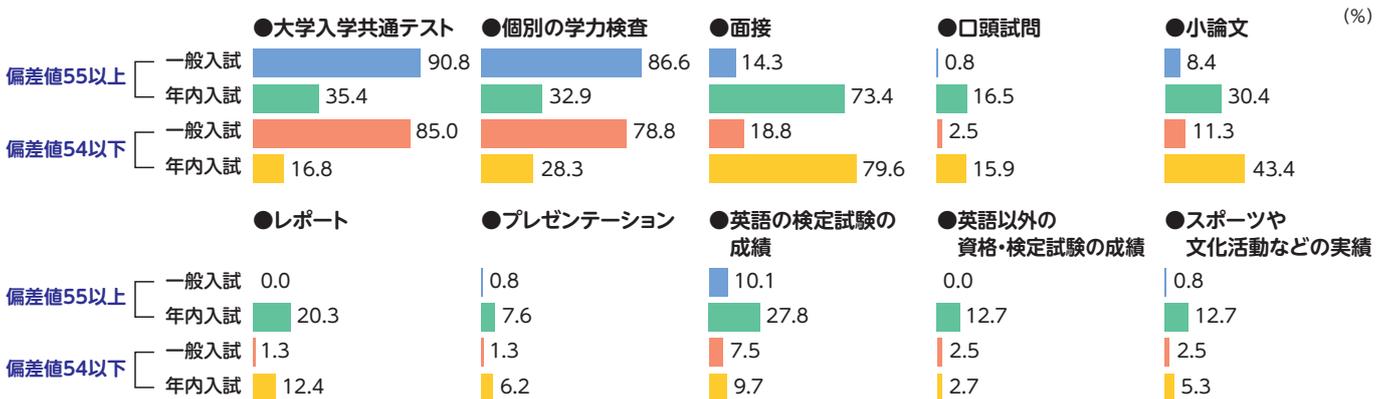
図2-2-2 入試方式(進学者全体、進路別、2024年調査)



注 「大学・短大進学者」は2024年4月から「四年制大学」「短期大学」に進学した人(485名)、「専門・各種学校進学者」は「専門・各種学校」に進学した人(87名)。

Q. 進学先の大学・学校に入学するために受けた入学試験の方法について、あてはまるものをすべて選んでください。※オンラインでの実施も含まれます。

図2-2-3 選抜方法(大学・短大進学者、入学難易度・入試方式別、2024年調査)



注1 複数回答。

注2 14項目のうち、入学難易度・入試方式別にみて、違いがみられた10項目を図示した。

注3 2024年4月から「四年制大学」もしくは「短期大学」に進学し、進学先の偏差値(自己評価)および入試方式を回答した391名を分析。入学難易度・入試方式別の4区分の算出方法と人数については、p4の基本属性の「入学難易度・入試方式別(2024年調査)」を参照。

2 進路選択の状況

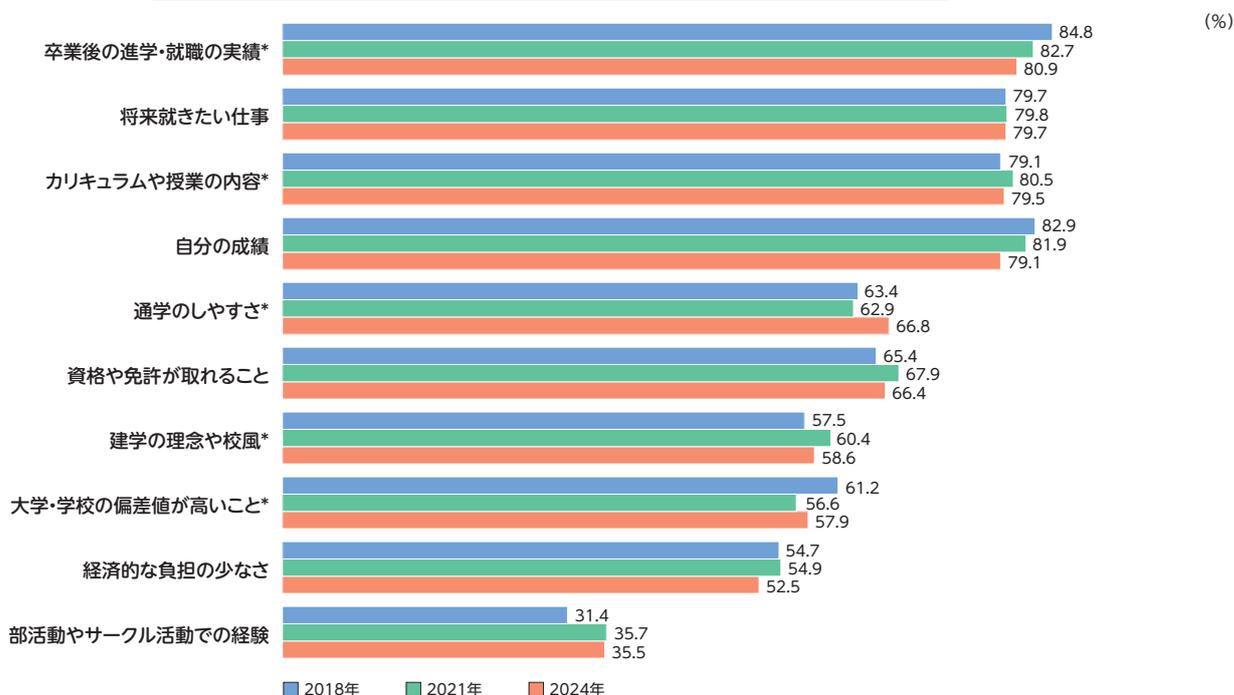
③進路決定の参考にしたこと

「年内入試」の高3生はより多くのことを参考にしている

【図2-3-1】進路決定の参考にしたことをたずねたところ、2018年から2024年にかけて大きな変化はみられなかったが、「卒業後の進学・就職の実績」「自分の成績」「大学・学校の偏差値が高いこと」はわずかに減少し、「通学のしやすさ」が増加した。【図2-3-2】2024年調査で大学・短大進学者の結果をみると、「偏差値55以上・一般入試」の高3生は「大学・学校の偏差値が高いこと」の割合が高い一方、「偏差値55以上・年内入試」の高3生は「進学・就職の実績」「建学の理念や校風」「部活動の経験」を参考にした割合が高い。また、「偏差値54以下・年内入試」では「将来就きたい仕事」の割合が高かった。「カリキュラムや授業の内容」「資格や免許が取れること」「建学の理念や校風」を参考にした割合は、偏差値に関係なく「年内入試」で高い。

Q. この4月からの進路を決める際に、次のことをそれぞれどれくらい参考にしましたか。

図2-3-1 進路決定の参考にしたこと(調査対象者全体)

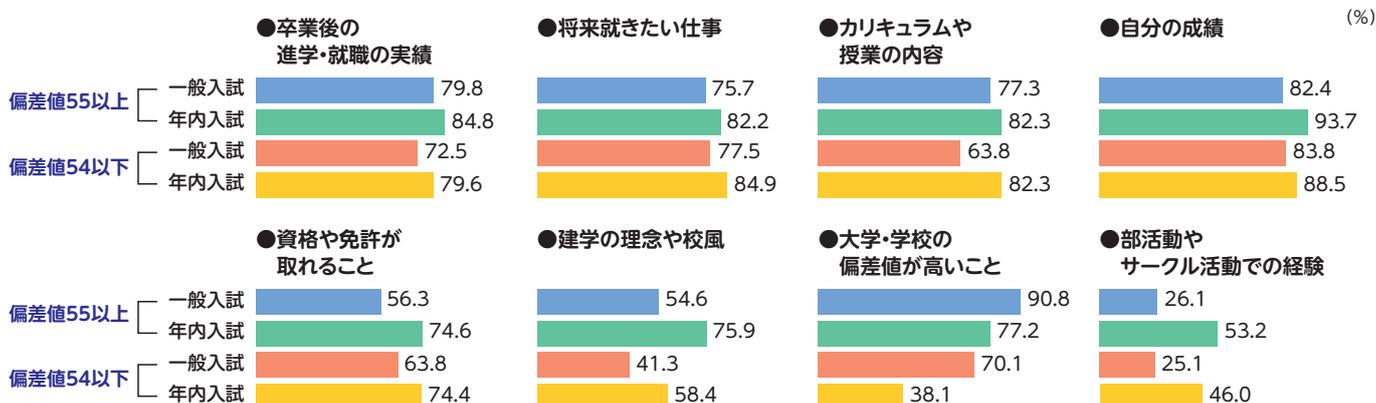


注1 「とても参考にした」+「まあ参考にした」の%。

注2 項目は2024年の数値(「とても参考にした」+「まあ参考にした」)の降順に示した。

注3 *がついている項目は、「四年制大学」「短期大学」「専門学校・各種学校」に進学すると回答した人のみを対象に分析。

図2-3-2 進路決定の参考にしたこと(大学・短大進学者、入学難易度・入試方式別、2024年調査)



注1 「とても参考にした」+「まあ参考にした」の%。

注2 図2-3-1の10項目のうち、入学難易度・入試方式別にみて、違いがみられた8項目を图示した。

注3 2024年4月から「四年制大学」もしくは「短期大学」に進学し、進学先の偏差値(自己評価)および入試方式を回答した391名を分析。入学難易度・入試方式別の4区分の算出方法と人数については、p4の基本属性の「入学難易度・入試方式別(2024年調査)」を参照。

2 進路選択の状況

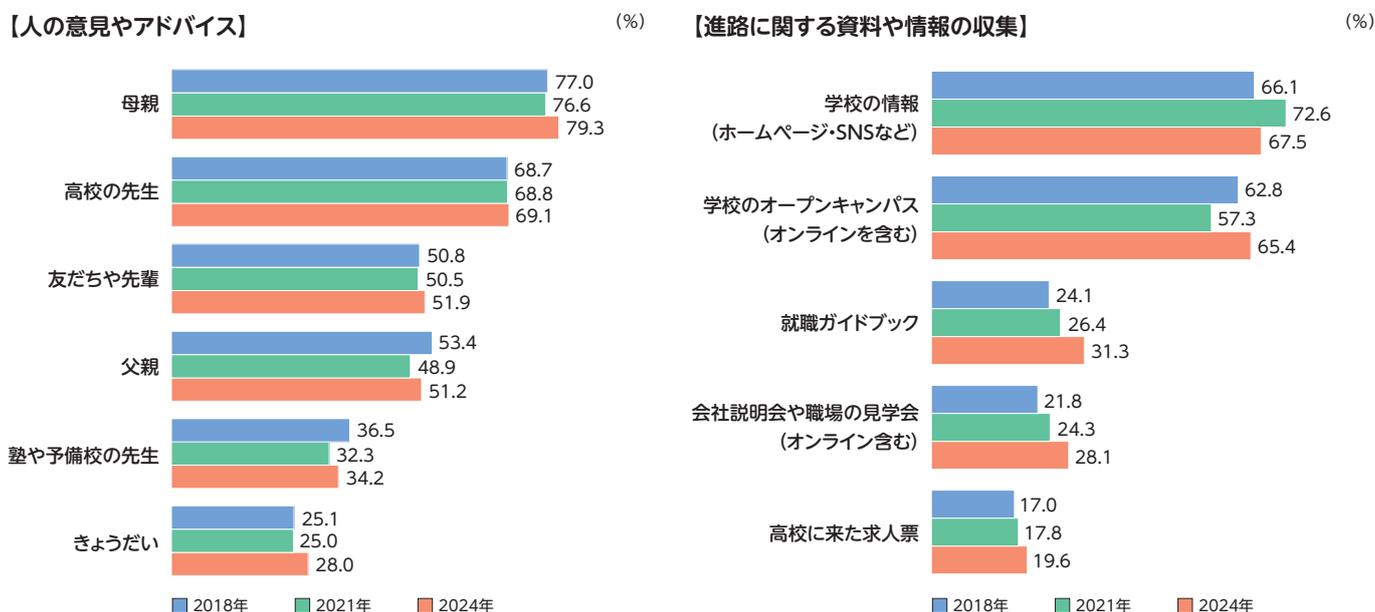
④ 進路決定に影響した人・情報

「学校のオープンキャンパス」がコロナ禍から回復して増加

【図2-4-1】進路決定に影響した人・情報のうち「人の意見やアドバイス」については、3回連続「母親」がトップである。それ以外は2018年から2024年にかけて大きな変化がみられない。その一方で、「進路に関する資料や情報の収集」については、「学校のオープンキャンパス」が増加しており、コロナ禍から回復した様子がうかがえる。また、「就職ガイドブック」「会社説明会や職場の見学会」の割合が高まった。【図2-4-2】2024年調査の結果を入学難易度・入試方式別にみると、「偏差値55以上・一般入試」では「友だちや先輩」「父親」「塾や予備校の先生」、「偏差値55以上・年内入試」では「母親」、「偏差値54以下・年内入試」では「高校の先生」「学校の情報」「学校のオープンキャンパス」が影響したと回答する割合が高い。

Q. この4月からの進路を決める際に、次の人の意見やアドバイス、および進路に関する資料や情報の収集は、それぞれどれくらい影響しましたか。

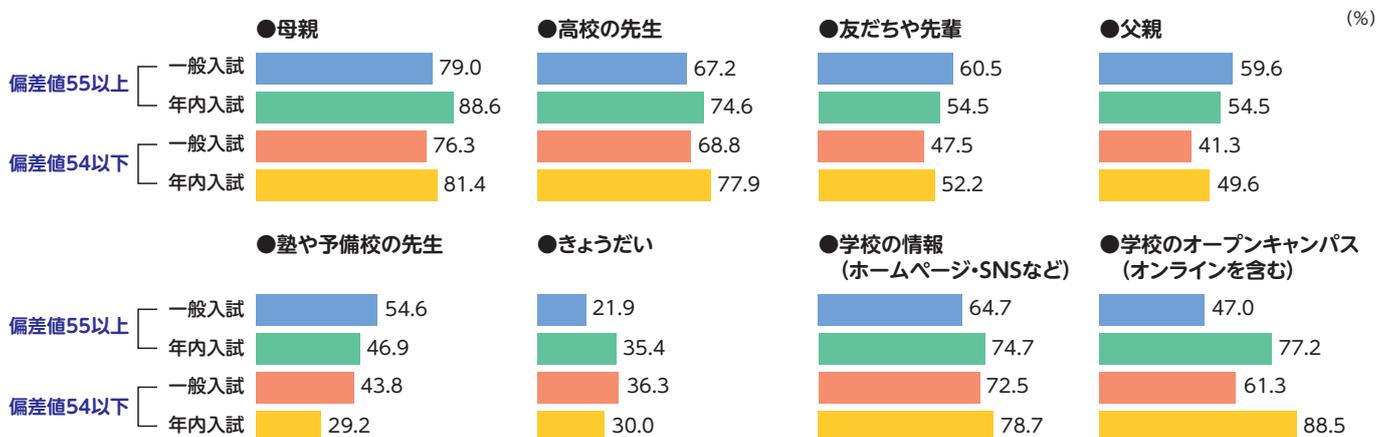
図2-4-1 進路決定に影響した人・情報(調査対象者全体)



注1 「とても影響した」+「まあ影響した」の%。

注2 項目は2024年の数値(「とても影響した」+「まあ影響した」)の降順に示した。

図2-4-2 進路決定に影響した人・情報(大学・短大進学者、入学難易度・入試方式別、2024年調査)



注1 「とても影響した」+「まあ影響した」の%。

注2 図2-4-1①と②の11項目のうち、入学難易度・入試方式別にみて、違いがみられた8項目を図示した。

注3 2024年4月から「四年制大学」もしくは「短期大学」に進学し、進学先の偏差値(自己評価)および入試方式を回答した391名を分析。入学難易度・入試方式別の4区分の算出方法と人数については、p4の基本属性の「入学難易度・入試方式別(2024年調査)」を参照。

2 進路選択の状況

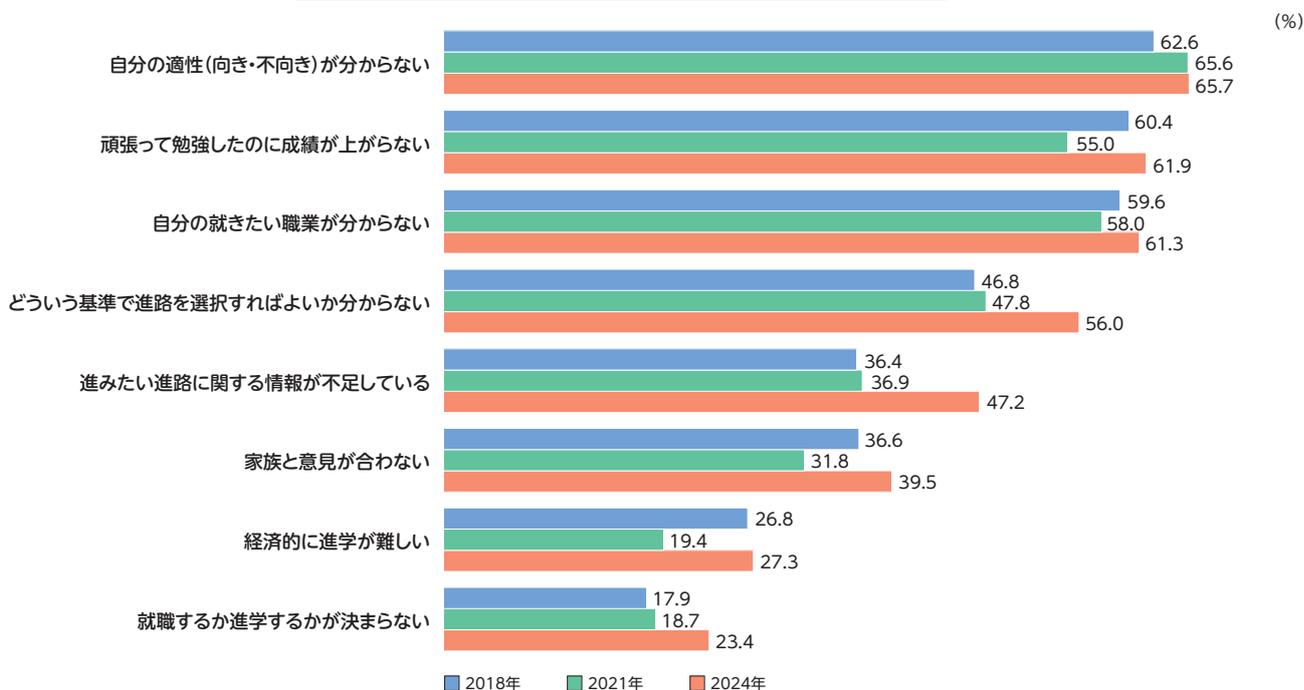
⑤進路選択の悩み

「選択の基準が分からない」「情報が不足している」が増加

【図2-5-1】全体に進路選択の悩みは増加傾向にある。2018年から2024年にかけての変化を確認すると、とくに「どういう基準で進路を選択すればよいか分からない」「進みたい進路に関する情報が不足している」に「あった」（よくあった+ときどきあった）と回答する割合がそれぞれ約10ポイントぐらい増えている。【図2-5-2】2024年調査について入学難易度・入試方式別にみると、「偏差値54以下」では入試方式を問わず、「自分の適性が分からない」「どういう基準で進路を選択すればよいか分からない」の割合が高い。また、「偏差値54以下・一般入試」では「頑張っても勉強したのに成績が上がらない」「家族と意見が合わない」「経済的に進学が難しい」の割合が、「偏差値54以下・年内入試」では「自分の就きたい職業が分からない」の割合が高かった。

Q. あなたは進路選択にあたって、次のことに悩んだことがありましたか。

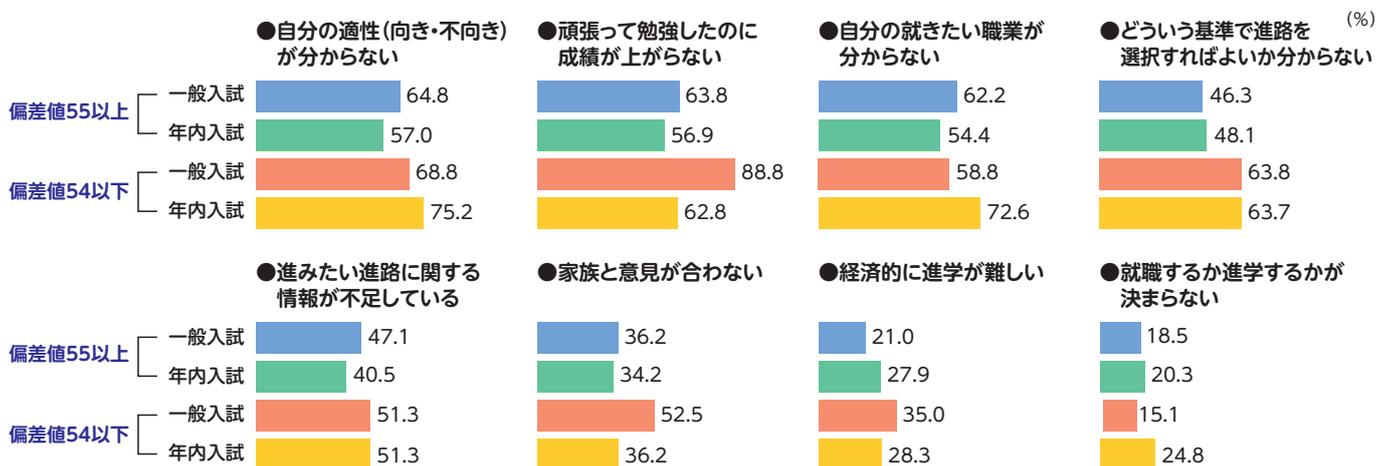
図2-5-1 進路選択の悩み(調査対象者全体)



注1 「よくあった」+「ときどきあった」の%。

注2 項目は2024年の数値(「よくあった」+「ときどきあった」)の降順に示した。

図2-5-2 進路選択の悩み(大学・短大進学者、入学難易度・入試方式別、2024年調査)



注1 「よくあった」+「ときどきあった」の%。

注2 2024年4月から「四年制大学」もしくは「短期大学」に進学し、進学先の偏差値(自己評価)および入試方式を回答した391名を分析。入学難易度・入試方式別の4区分の算出方法と人数については、p4の基本属性の「入学難易度・入試方式別(2024年調査)」を参照。

2 進路選択の状況

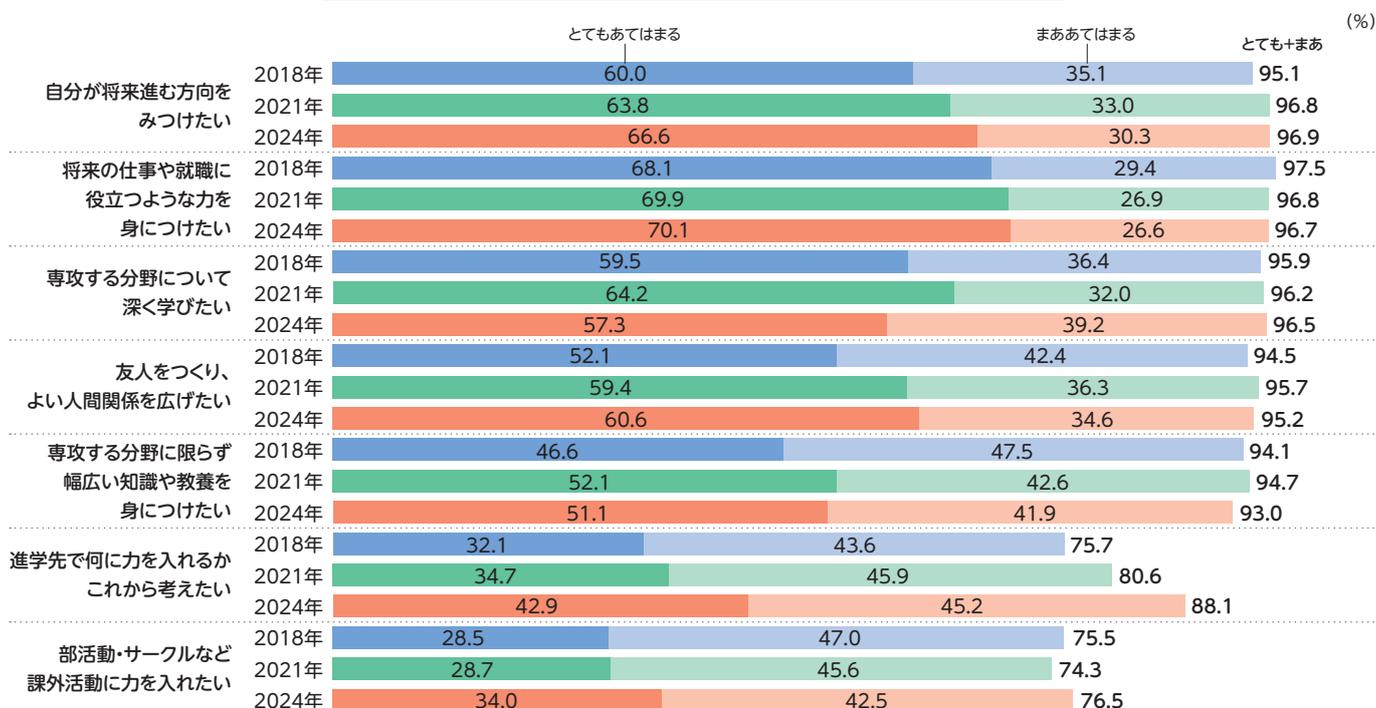
⑥入学後にしたいこと

「進学先で何に力を入れるかこれから考えたい」が増加

【図2-6-1】大学・短大進学者に入学後にしたいことをたずねたところ、「進学先で何に力を入れるかこれから考えたい」を肯定する割合(とてもあてはまる+まああてはまる)が増加傾向にある。【図2-6-2】2024年調査の結果(とてもあてはまる)を入学難易度・入試方式別にみると、「偏差値55以上」では入試方式を問わず、「自分が将来進む方向をみつけない」「将来の仕事や就職に役立つ力を身につけたい」を肯定する割合が高い。このほか、「偏差値55以上・年内入試」では「専攻分野について深く学びたい」「専攻分野に限らず幅広い知識や教養を身につけたい」「部活動・サークルなど課外活動に力を入れたい」など多くの項目で、「とてもあてはまる」の割合が高かった。

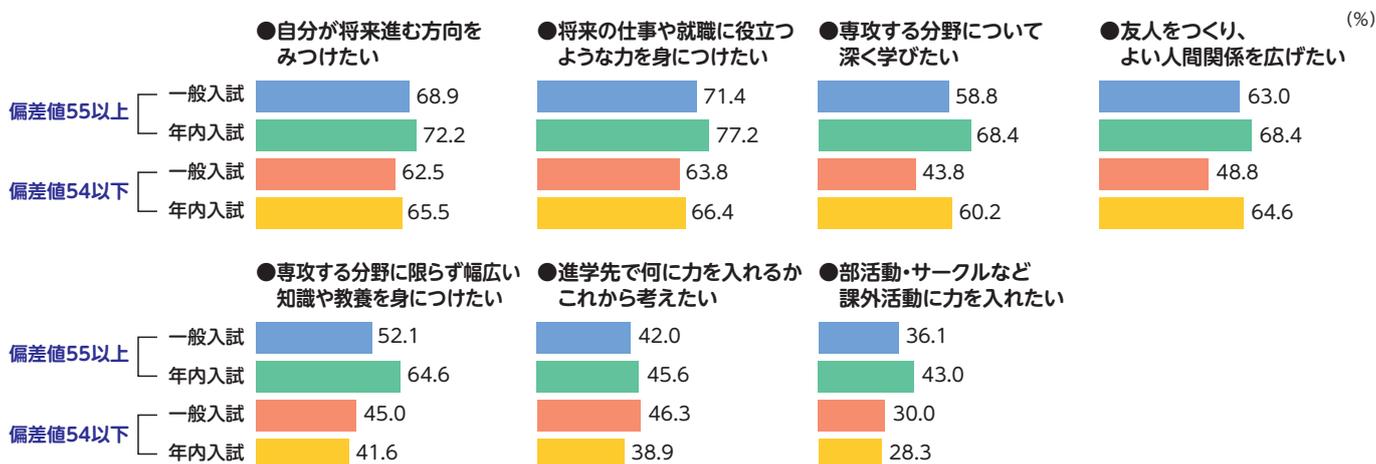
Q. あなたが進学先に入学するにあたって、次のことはどれくらいあてはまりますか。

図2-6-1 入学後にしたいこと(大学・短大進学者)



注 項目は2024年の数値(「とてもあてはまる」+「まああてはまる」)の降順に示した。

図2-6-2 入学後にしたいこと(大学・短大進学者、入学難易度・入試方式別、2024年調査)



注1 「とてもあてはまる」の%。

注2 2024年4月から「四年制大学」もしくは「短期大学」に進学し、進学先の偏差値(自己評価)および入試方式を回答した391名を分析。入学難易度・入試方式別の4区分の算出方法と人数については、p4の基本属性の「入学難易度・入試方式別(2024年調査)」を参照。

2 進路選択の状況

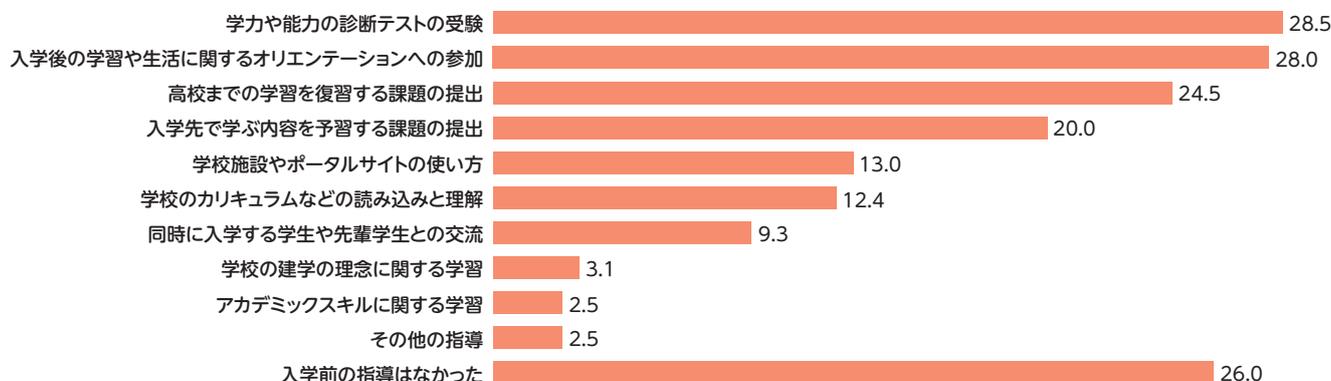
⑦進学先の入学前教育

「年内入試」では「復習」「予習」の課題提出が多い

【図2-7-1】2024年調査では大学・短大進学者に対して、進学先からの入学前教育の状況を複数回答でたずねた。その結果、大学・短大進学者のうち、7割が何らかの入学前教育があったことがわかった。指導内容をみると、3割が「学力や能力の診断テストの受験」「学習や生活に関するオリエンテーションへの参加」を、2割が「高校までの学習内容の復習」「大学で学ぶ内容の予習」を選択した。「入学前の指導はなかった」は3割弱である。【図2-7-2】入学難易度・入試方式別に実施状況を見ると、「年内入試」は入学難易度を問わず「高校までの学習内容の復習」「大学で学ぶ内容の予習」などの学習内容に関する指導が多い。一方で、「一般入試」は「学校のカリキュラムなどの読み込みと理解」の割合が高い傾向がみられたが、「入学前の指導はなかった」も4割前後いる。

Q. 進学先から、入学前の準備として次のような指導はありましたか。あてはまるものをすべて選んでください。

図2-7-1 進学先の入学前教育(大学・短大進学者、2024年調査)



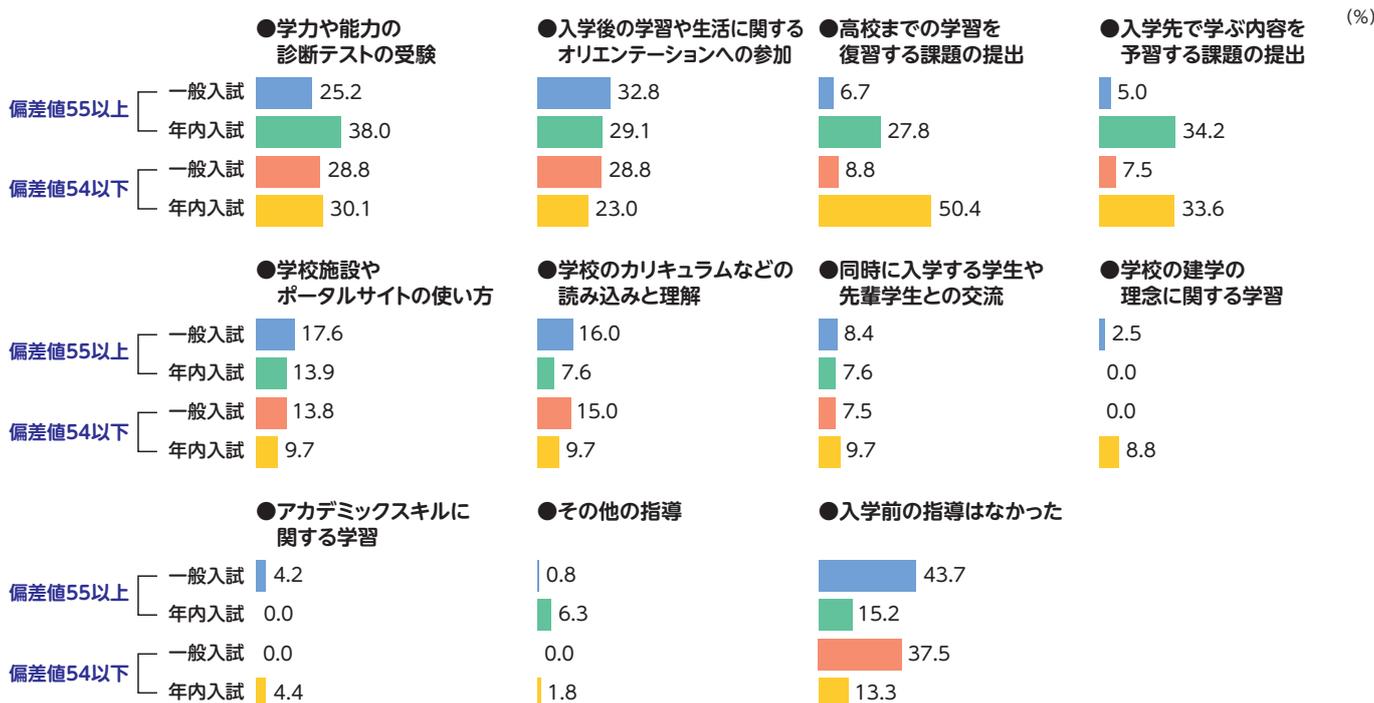
注1 複数回答。

注2 項目は「入学前の指導はなかった」を除き、数値の降順に示した。

注3 「四年制大学」「短期大学」に進学した人を対象に分析した。

注4 この質問は2024年調査でのみたずねている。

図2-7-2 進学先の入学前教育(大学・短大進学者、入学難易度・入試方式別、2024年調査)



注1 複数回答。

注2 2024年4月から「四年制大学」もしくは「短期大学」に進学し、進学先の偏差値(自己評価)および入試方式を回答した391名を分析。入学難易度・入試方式別の4区分の算出方法と人数については、p4の基本属性の「入学難易度・入試方式別(2024年調査)」を参照。

2 進路選択の状況

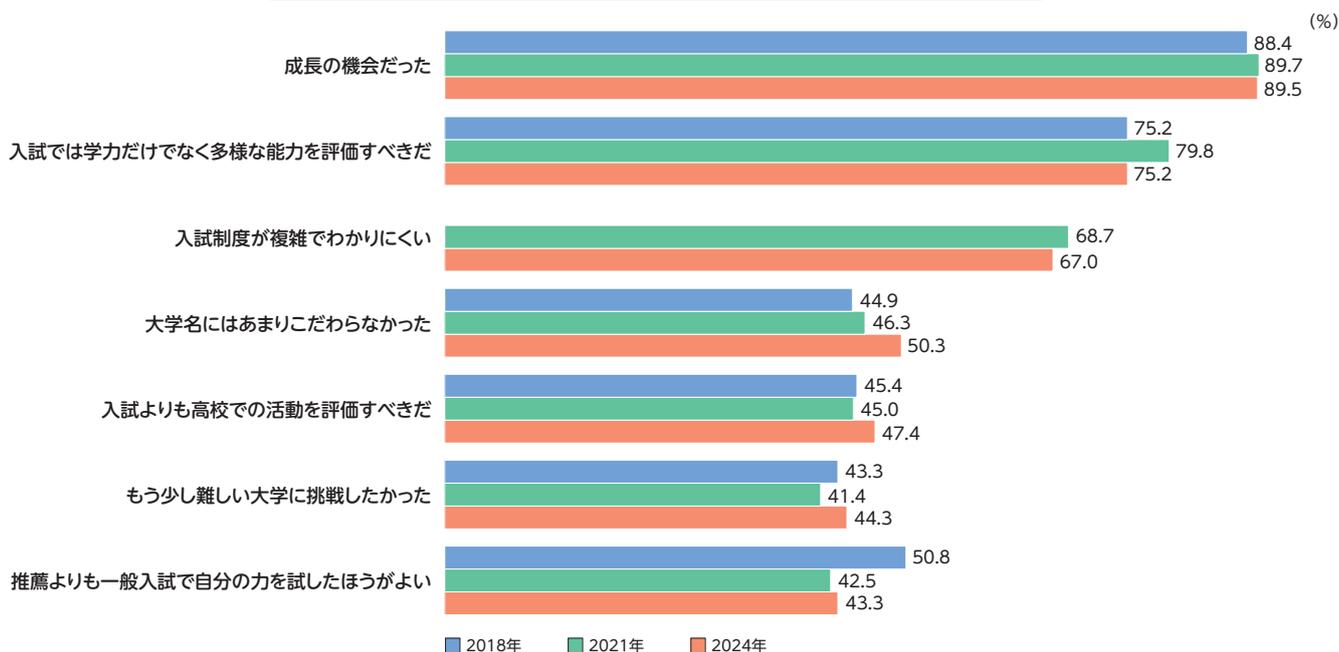
⑧ 大学受験に対する意識

「大学名にはあまりこだわらなかった」が増加して過半数に

【図2-8-1】大学受験に対する意識では、大学・短大進学者の9割が「成長の機会だった」と回答している。2018年から2024年の変化をみると、「大学名にはあまりこだわらない」を肯定する割合(とてもそう思う+まあそう思う)が増加し、半数を超えた。【図2-8-2】入学難易度・入試方式別にみると、入学難易度を問わず「一般入試」は「もう少し難しい大学に挑戦したかった」「推薦よりも一般入試で自分の力を試したほうがよい」の割合が高く、「年内入試」は「入試では学力だけでなく多様な能力を評価すべきだ」「入試よりも高校での活動を評価すべきだ」の割合が高い。入試方式によって大学受験に対する意識が異なることがわかる。「大学名にはあまりこだわらなかった」は、「偏差値54以下・年内入試」で肯定割合が高かった。

Q. あなたは大学受験について、どう思いますか。

図2-8-1 大学受験に対する意識(大学・短大進学者)

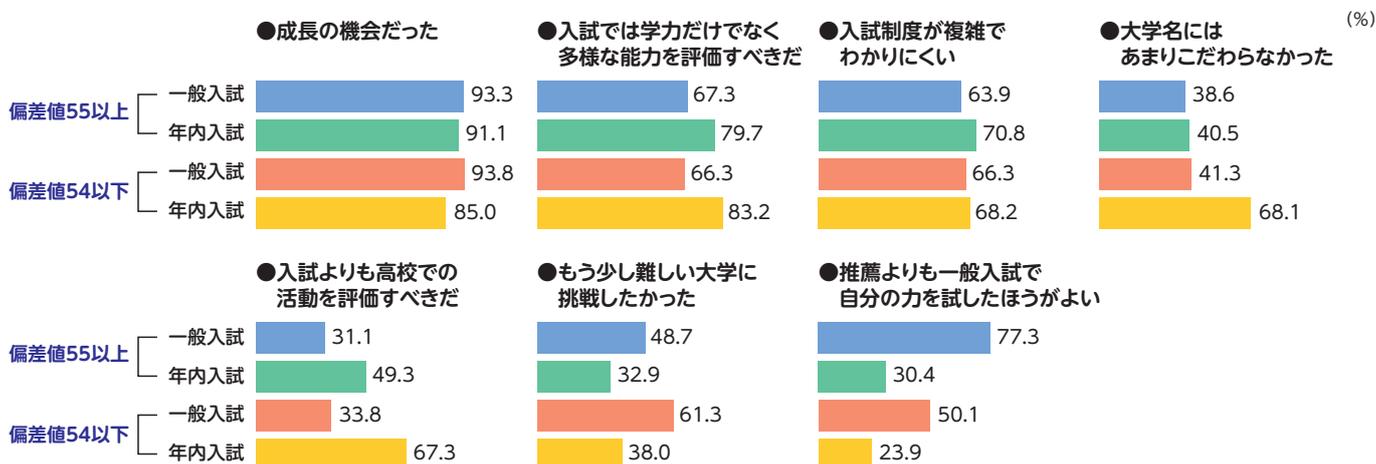


注1 「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

注2 項目は2024年の数値(「とてもそう思う」+「まあそう思う」)の降順に示した。

注3 「入試制度が複雑でわかりにくい」は、2018年調査ではたずねていない。

図2-8-2 大学受験に対する意識(大学・短大進学者、入学難易度・入試方式別、2024年調査)



注1 「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

注2 2024年4月から「四年制大学」もしくは「短期大学」に進学し、進学先の偏差値(自己評価)および入試方式を回答した391名を分析。入学難易度・入試方式別の4区分の算出方法と人数については、p4の基本属性の「入学難易度・入試方式別(2024年調査)」を参照。

2 進路選択の状況

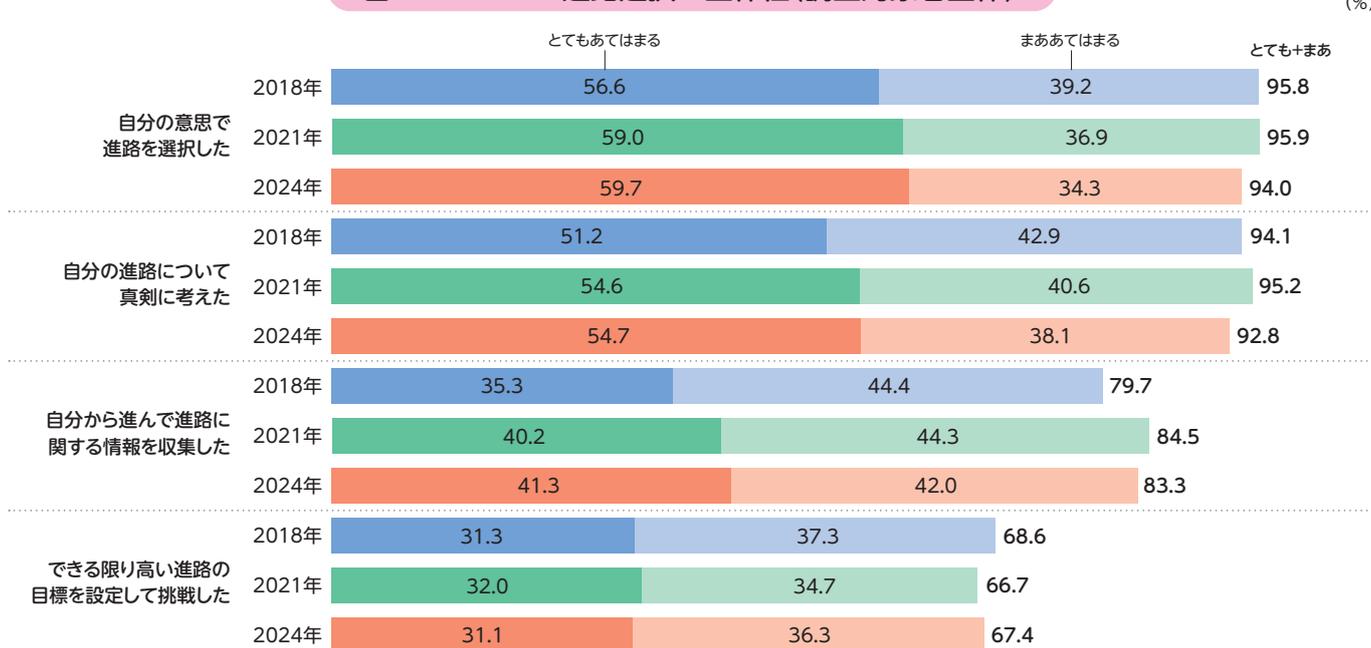
⑨ 進路選択の主体性

「自分から進んで進路に関する情報を収集した」高3生は増加傾向

【図2-9-1】進路選択における主体性をたずねる項目では、9割を超える高3生が「自分の意思で進路を選択した」「自分の進路について真剣に考えた」を肯定(とてもあてはまる+まああてはまる)している。また、「自分から進んで進路に関する情報を収集した」は、2018年と比較するとわずかに増加した。【図2-9-2】2024年調査の大学・短大進学者について入学難易度・入試方式別にみると、「自分から進んで進路に関する情報を収集した」に「とてもあてはまる」と回答した割合が、「偏差値55以上・年内入試」で高い。また、「できる限り高い進路の目標を設定して挑戦した」を肯定する割合は「偏差値55以上・一般入試」でもっとも高く、「偏差値54以下・年内入試」でもっとも低かった。

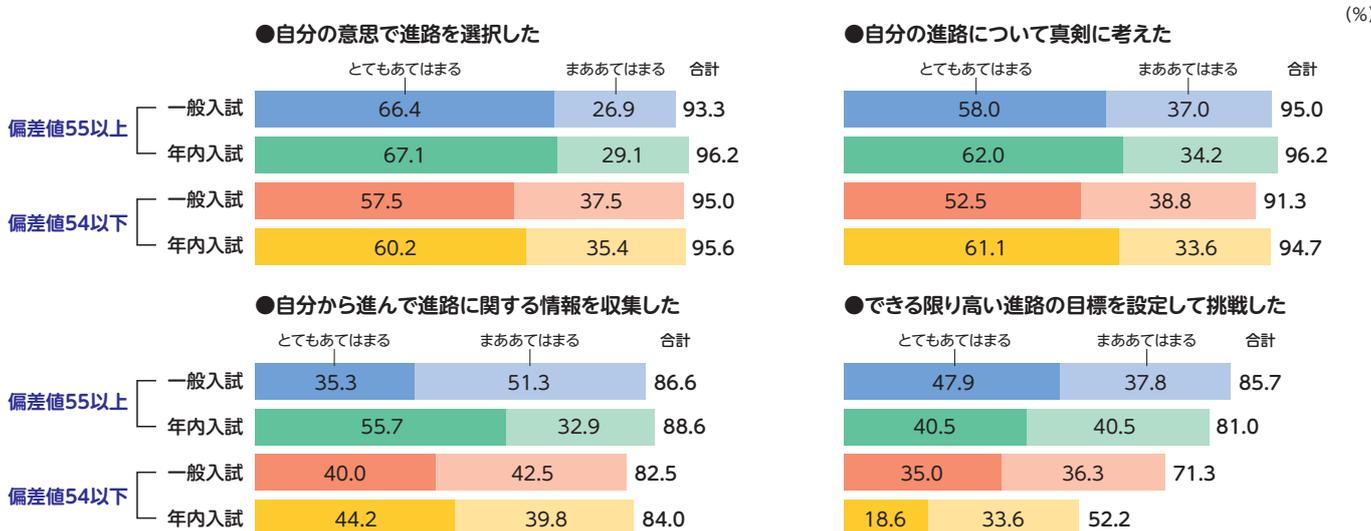
Q. あなたが進路を決めるにあたって、次のことはどれくらいあてはまりますか。

図2-9-1 進路選択の主体性(調査対象者全体)



注 項目は2024年の数値(「とてもあてはまる」+「まああてはまる」)の降順に示した。

図2-9-2 進路選択の主体性(大学・短大進学者、入学難易度・入試方式別、2024年調査)



注 2024年4月から「四年制大学」もしくは「短期大学」に進学し、進学先の偏差値(自己評価)および入試方式を回答した391名を分析。入学難易度・入試方式別の4区分の算出方法と人数については、p4の基本属性の「入学難易度・入試方式別(2024年調査)」を参照。

2 進路選択の状況

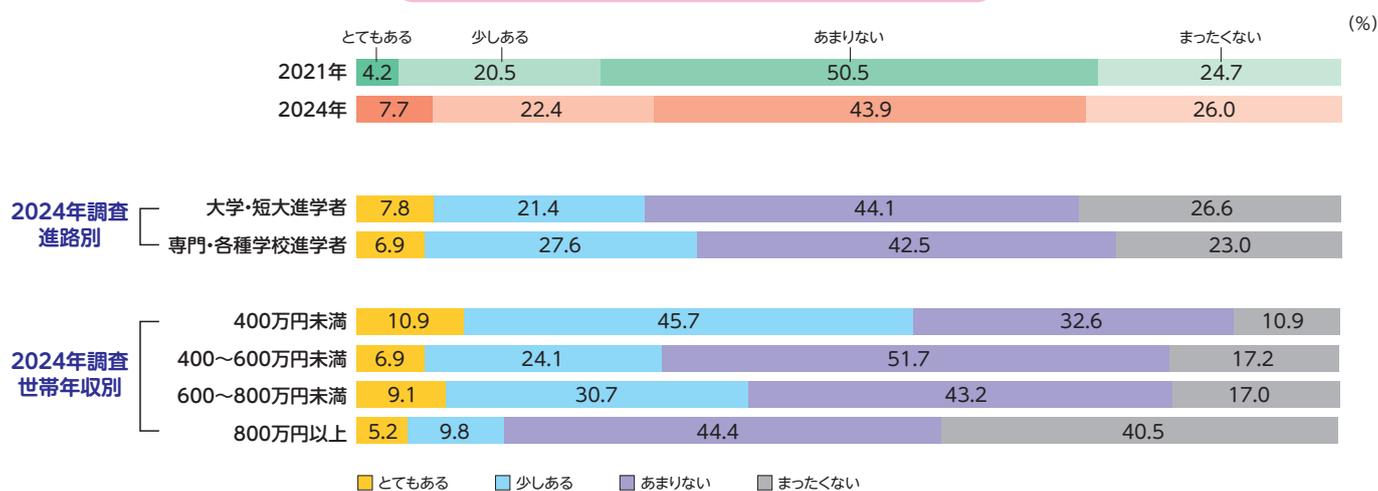
⑩ 経済的不安・奨学金の意向

経済的不安をもつ高3生が前回調査から増加

【図2-10-1】入学後に経済的な理由で学業を続けられない心配があるかをたずねたところ、肯定する割合(とてもある+少しある)は2021年の24.7%から2024年は30.1%と5.4ポイント増加した。世帯年収によってその比率は異なり、「400万円未満」の世帯だと半数以上が肯定しているが、「800万円以上」の世帯では15.0%にとどまる。【図2-10-2】奨学金の意向も同様の傾向が表れており、「受けるつもり」という回答は2018年に37.7%だったものが2024年には42.0%と4.3ポイント増加した。奨学金の意向も世帯年収によって異なっており、「400万円未満」の世帯だと67.4%が「受けるつもり」と回答しているが、「800万円以上」の世帯では26.1%にとどまる。

Q. 入学後、経済的な理由で学業を続けられない心配はどれくらいありますか。

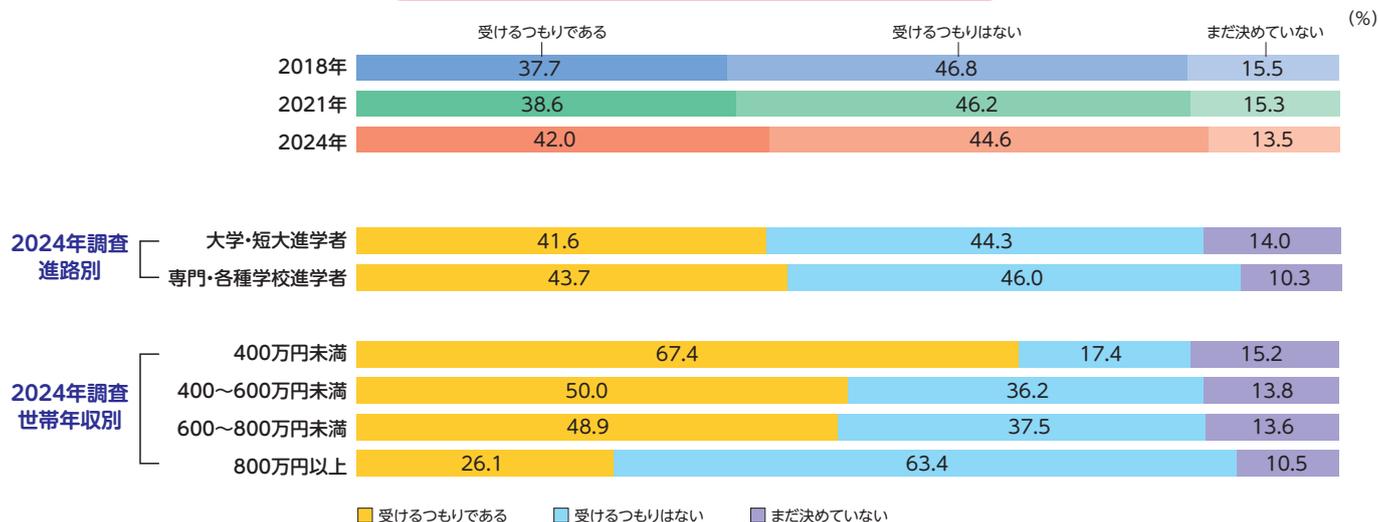
図2-10-1 経済的不安(進学者全体)



注1 この質問は2018年ではたずねていない。
 注2 回答者は各調査年の4月から「四年制大学」「短期大学」「専門学校・各種学校」に進学した人。
 注3 世帯年収は、「子どもの生活と学びに関する親子調査」の保護者の回答と紐づけている。

Q. あなたは、入学後に、奨学金を受取るつもりですか。

図2-10-2 奨学金の意向(進学者全体)



注1 回答者は各調査年の4月から「四年制大学」「短期大学」「専門学校・各種学校」に進学した人。
 注2 世帯年収は、「子どもの生活と学びに関する親子調査」の保護者の回答と紐づけている。

3 高校生活のふりかえりと将来に対する意識

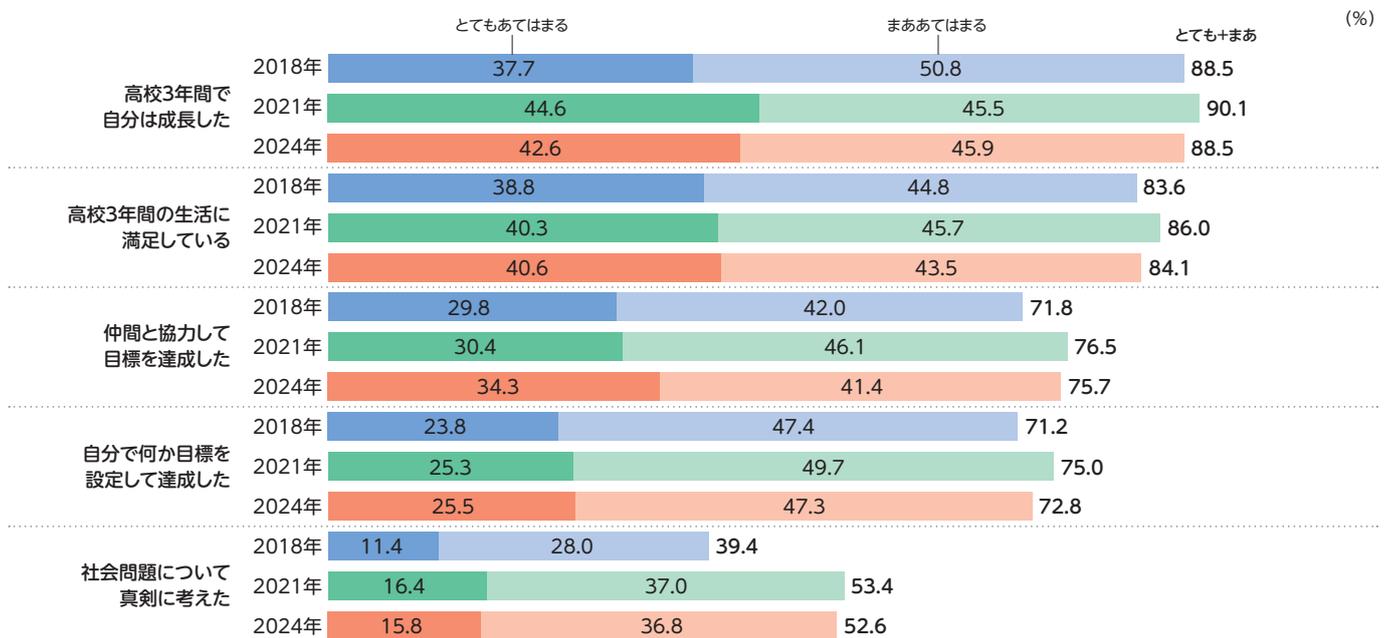
① 高校生活のふりかえり

8～9割は高校生活での成長や満足を実感している

【図3-1-1】高校生活をふりかえってもらったところ、9割が「高校3年間で自分は成長した」、8割が「高校3年間の生活に満足している」「仲間と協力して目標を達成した」、7割が「自分で何か目標を設定して達成した」を肯定(とてもあてはまる+まああてはまる)した。2018年と比べて大きく変化したのは「社会問題について真剣に考えた」で、その肯定割合は2018年は4割だったが、2024年は5割を超えている。【図3-1-2】2024年調査の大学・短大進学者について入学難易度・入試方式別にみると、いずれの項目でも「偏差値55以上・年内入試」の数値が高い傾向がみられる。このグループの高校生は、充実した高校生活だったと実感している者が相対的に多いようだ。

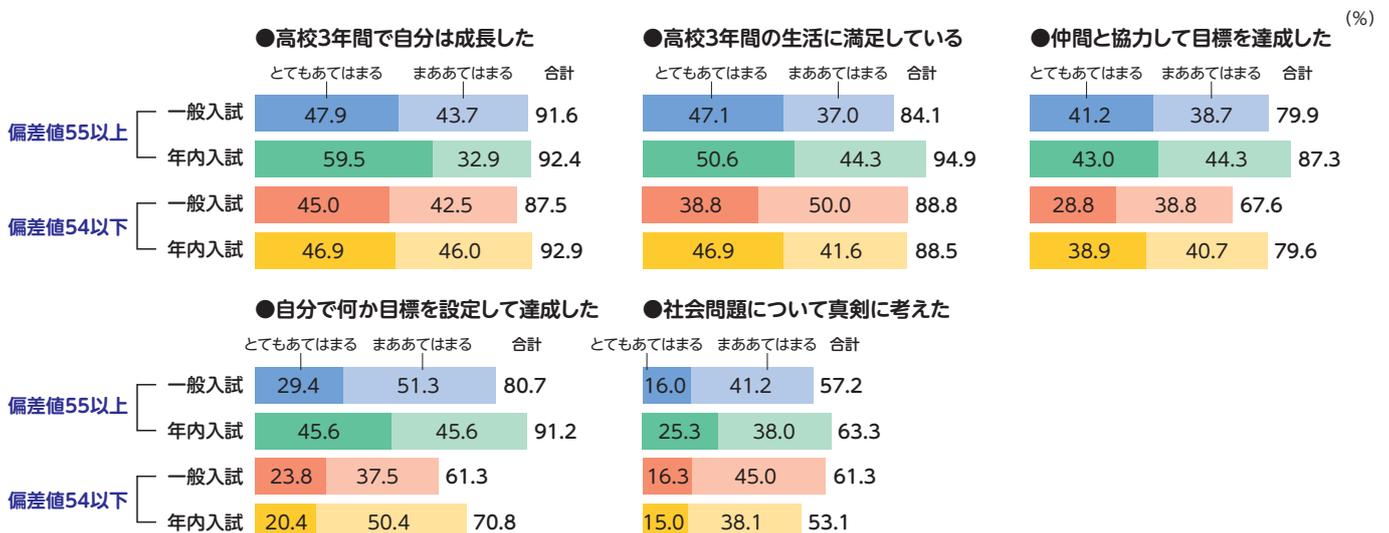
Q. 高校生活の3年間でふりかえって、次のことはどれくらいあてはまりますか。

図3-1-1 高校生活のふりかえり(調査対象者全体)



注 項目は2024年の数値(「とてもあてはまる」+「まああてはまる」)の降順に示した。

図3-1-2 高校生活のふりかえり(大学・短大進学者、入学難易度・入試方式別、2024年調査)



注 2024年4月から「四年制大学」もしくは「短期大学」に進学し、進学先の偏差値(自己評価)および入試方式を回答した391名を分析。入学難易度・入試方式別の4区分の算出方法と人数については、p4の基本属性の「入学難易度・入試方式別(2024年調査)」を参照。

3 高校生活のふりかえりと将来に対する意識

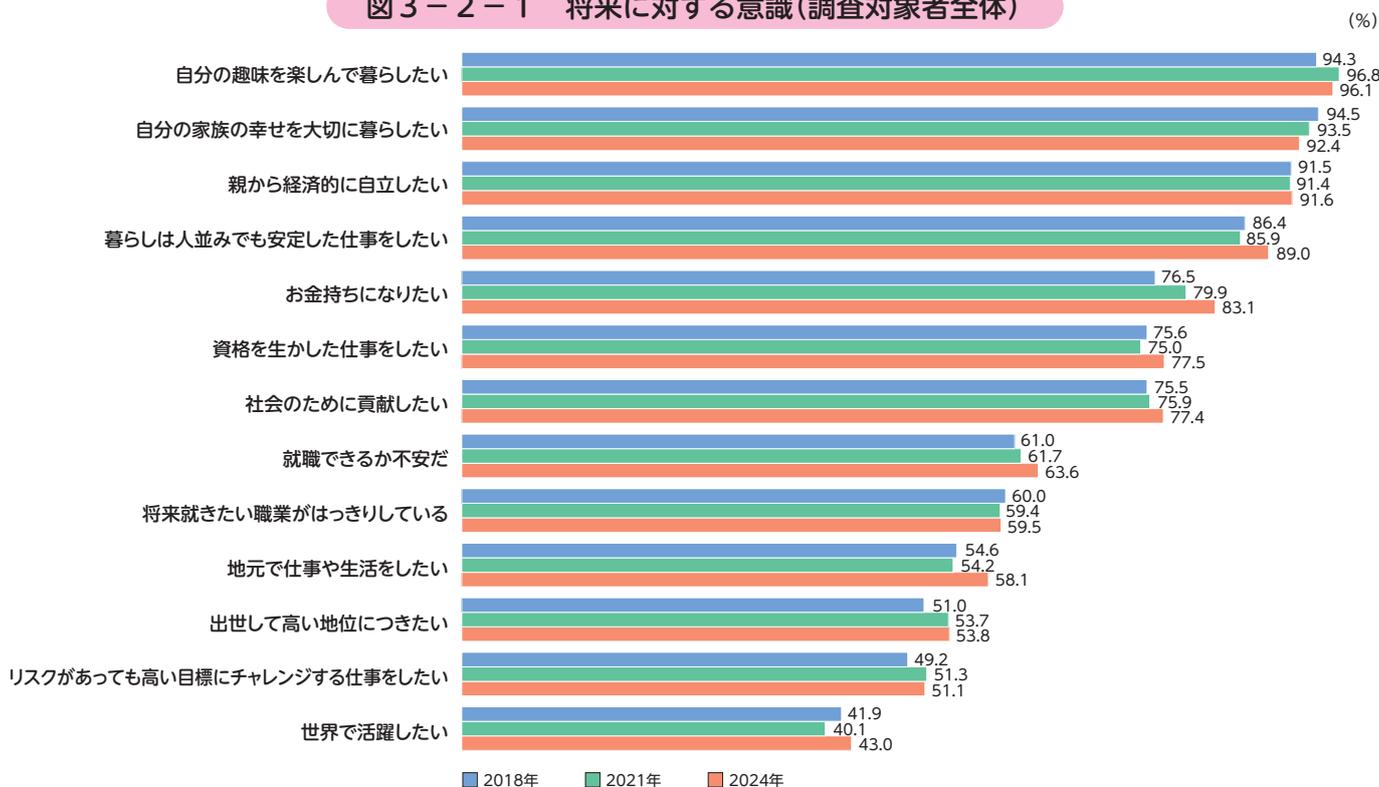
② 将来に対する意識

「お金持ちになりたい」が6年間で増加

【図3-2-1】将来に対する意識についてたずねた質問では経年で大きく変化した項目が少ないが、「お金持ちになりたい」と回答（とてもあてはまる+まああてはまる）する割合が増加している。【図3-2-2】2024年調査の大学・短大進学者の結果を入学難易度・入試方式別にみると、「偏差値55以上」では入試方式を問わず、「出世して高い地位につきたい」「世界で活躍したい」と回答する割合が高い。また、「年内入試」では入学難易度を問わず、「地元で仕事や生活をしたい」と考える割合が高い傾向がみられる。さらに、「偏差値55以上・年内入試」のグループでは、「将来就きたい職業がはっきりしている」の割合がほかのグループよりも高かった。

Q. あなた自身の将来について、次のことはどれくらいあてはまりますか。

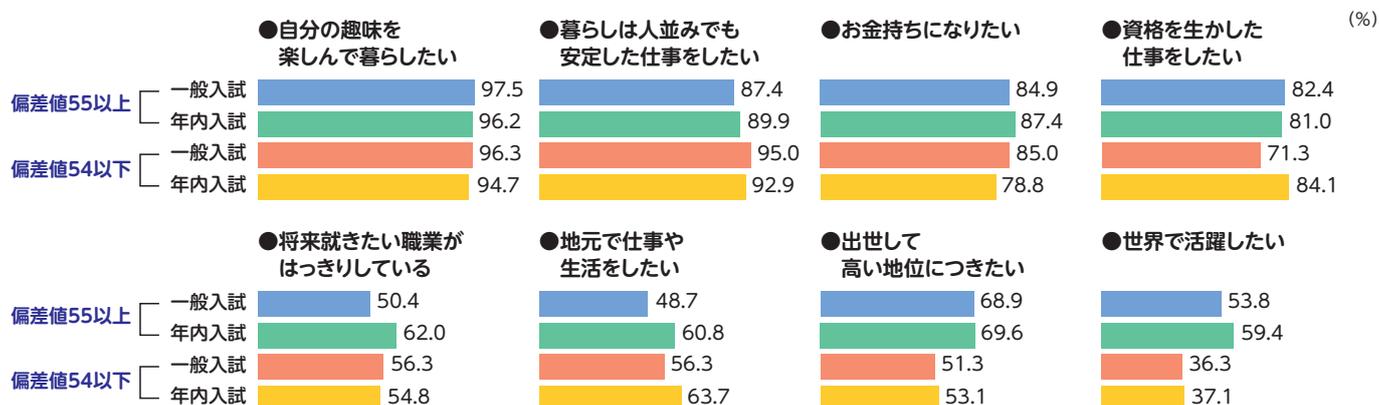
図3-2-1 将来に対する意識(調査対象者全体)



注1 「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

注2 項目は2024年の数値(「とてもあてはまる」+「まああてはまる」)の降順に示した。

図3-2-2 将来に対する意識(大学・短大進学者、入学難易度・入試方式別、2024年調査)



注1 「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

注2 図3-2-1の13項目のうち、入学難易度・入試方式別にみて、違いがみられた8項目を图示した。

注3 2024年4月から「四年制大学」もしくは「短期大学」に進学し、進学先の偏差値(自己評価)および入試方式を回答した391名を分析。入学難易度・入試方式別の4区分の算出方法と人数については、p4の基本属性の「入学難易度・入試方式別(2024年調査)」を参照。

東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所 共同研究 「子どもの生活と学び」研究プロジェクト

調査企画・分析メンバー

プロジェクト代表者

佐藤 香 (東京大学社会科学研究所 教授)

野澤 雄樹 (ベネッセ教育総合研究所 所長)

プロジェクトメンバー

耳塚 寛明 (お茶の水女子大学 名誉教授、青山学院大学 客員教授)

木村 治生 (ベネッセ教育総合研究所 主席研究員)

秋田 喜代美 (学習院大学 教授、東京大学 名誉教授)

岡部 悟志 (ベネッセ教育総合研究所 主任研究員)

松下 佳代 (京都大学 教授)

福本 優美子 (ベネッセ教育総合研究所 研究員)

石田 浩 (東京大学社会科学研究所 特別教授)

朝永 昌孝 (ベネッセ教育総合研究所 研究員)

藤原 翔 (東京大学社会科学研究所 准教授)

松本 留奈 (ベネッセ教育総合研究所 主任研究員)

大野 志郎 (東京大学社会科学研究所 特任准教授)

中島 功滋 (ベネッセ教育総合研究所 主任研究員)

大崎 裕子 (立教大学 特任准教授)

大内 初枝 (ベネッセ教育総合研究所 研究スタッフ)

渡邊 未央 (ベネッセ教育総合研究所 研究スタッフ)

※ワーキンググループメンバー

小野田 亮介 (山梨大学大学院 准教授)

数実 浩佑 (宝塚大学 准教授)

猪原 敬介 (北里大学 講師)

豊永 耕平 (近畿大学 講師)

※所属・肩書きは、2024年11月時点のものです。

研究プロジェクト WEBサイトのご案内

東京大学社会科学研究所

<https://web.iss.u-tokyo.ac.jp/clal/>

東京大学 社会科学研究所
子どもの生活と学び 研究プロジェクト

ISS

東京大学 社会科学研究所は、2013年度より
ベネッセ教育総合研究所と共同で「子どもの生活と学び」研究プロジェクトを行っています。

東京大学社会科学研究所はベネッセ教育総合研究所と「子どもの生活と学び」に関する共同研究プロジェクトを実施しています。
小学校1年生から高校3年生までの親子、高校卒業後は子ども本人を対象に、同じ対象者を追跡する「日本縦断調査 (Japanese Longitudinal Study of Children and Parents) (JLSCP)」、Japanese Longitudinal Study of Youth (JLSY)」を行い、子どもの生活や学習の状況、保護者の子育ての様子、さらに子ども本人は社会に出てからの様子を複数年にわたって追いかけることで、子どもを取り巻く状況の変化と子どもが社会人として自立するまでの成長のプロセスを明らかにしていきます。
これらの豊富なデータから得られたエビデンスをもとに、現在を生きる子どもにとってのよりよい子育て、教育のあり方を検討していきます。

詳しくはプロジェクトホームページ (ベネッセ教育総合研究所内) をご覧ください。

ベネッセ教育総合研究所

<https://benesse.jp/berd/special/childedu/>

ベネッセ教育総合研究所
「子どもの生活と学び」研究プロジェクト

約20,000組の
親子調査 (日本最大規模) で
学びや生活の実態を
明らかにします。

調査データ 研究成果

最新情報

すべて 調査データ 研究成果 モニター

「高校生活と進路に関する調査2024」ダイジェスト版

発行 日：2024年12月20日

発行 人：野澤 雄樹

編集 人：木村 治生

発行 所：(株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所

編集 協力：邵 勤風

0HNBC3

©Benesse Educational Research and Development Institute

無断転載を禁じます。